

第2章 吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

農学部連合獣医学科棟の新営が、吉田構内の中央部からやや南東に位置する、農学部本館棟と講義棟間に計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館が平成3年7月22日から8月10日にかけて試掘調査を実施している。調査の詳細は年報Ⅺで報告を行っているが、概略を再録しておく。

試掘調査は新営予定地（26m×20m）約520m²の中央部に東西幅2m、長さ13mのAトレンチ、Aトレンチと平行して北側に幅1m、長さ9mのCトレンチ、Aトレンチと平行して南側に幅1m、長さ8.5mのDトレンチ、これらのトレンチに直交する方向で東端部に幅2m、西北長さ19.5mのBトレンチと計4本のトレンチを設定して行っている。その結果、南北方向に流れる河川跡の西側河岸を検出した。河川跡の砂礫からなる埋積土中からは、縄文晩期土器や石鏃が出土した。土器は摩滅せず形をとどめるものがあることから、少なくとも縄文時代晩期には開口していたことが想定された。

試掘調査の結果を受けて、平成4年3月に埋蔵文化財資料館運営委員会で協議を行った。その結果、新営工事の際には、事前に発掘調査の実施が必要であるとの判断がくださった。この時点において、新営の予算措置は未定であり、事前調査は先送りと考えられていた。ところが、平成4年7月に至って補正予算のため、急遽新営計画が具体化し、早急な対応が必要となった。また、平成4年度に入ってから農学部連合獣医学科棟の設計変更が行われ、要求建物の床面積が規模を拡大した。

これらのことを踏まえ埋蔵文化財資料館では、平成4年9月8日から11月13日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は約980m²である。なお、遺構ではないため、河川跡は河床上面まで機械力で掘削し、その後は人力によった。河川埋積土の遺物採集は、丹念に行っている。

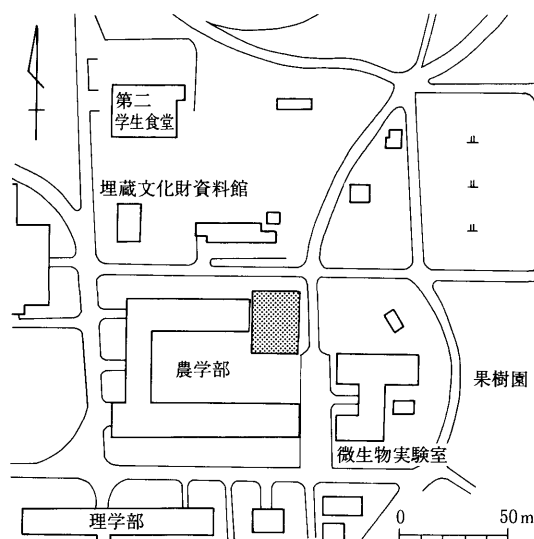


Fig. 4 調査区位置図

2 層位 (Fig.6・7)

当調査区の基本層序は、次の順である。

- | | |
|--------------------|------------------|
| 第Ⅰ層：明茶灰色粘質土（客土） | 第Ⅱ層：黄灰色粘土（旧水田耕土） |
| 第Ⅲ層：暗褐灰色粘質土（旧水田床土） | 第Ⅳ層：地山 |

本調査区の現状は、駐車場として利用されるバラス敷の平坦地で、現地表は標高21.4mを測る。第Ⅰ層は構内造成土で、厚さは約20cmほどである。第Ⅱ・Ⅲ層は統合移転前の旧水田に伴うものである。ただし、調査区の旧地形は南から北へ行くにしたがって高くなっており、調査区の北3分の2は削平のため第Ⅱ・Ⅲ層が認められなかった。残りのよい南壁断面で、第Ⅱ層の上面は標高21.2mを測る。

第Ⅳ層の地山であるが、黄色系の粘土あるいはシルトが複雑な堆積状況を示し一定していない。縄文河川に侵食されるため、調査区の北西隅にのみ残存した。第Ⅳ層の上面は標高約21.2mを測る。なお、この第Ⅳ層の直下（標高20.4～20.6m）には、白色の円礫を含んだ青色系の砂礫が堆積する。

3 縄文河川跡 (Fig.5, PL.3)

本調査区に埋没する縄文時代河川跡に関しては、平成3年度の試掘調査及び平成3年度農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査²⁾によりある程度のデータは蓄積されていた。それによれば、標高約21.1～21.2mを検出面として、北から南への流路をもつことが判明している。試掘調査では東側の河岸を検出することはできなかった。しかし、試掘調査のすぐ東側で実施した農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査では埋め土の直下に地山層を検出し、河川の埋積土は検出されていない。このことにより、河幅は17m以上、25m以下と推定された。事前調査はこれらのデータをもとに行われた。

河川跡の上面は、調査区北側については試掘調査と同じく標高約21.1～21.2mで検出したが、調査区南側は標高約21.0mとやや低かった。これは河床の検出面についても同じで、調査区北側では標高20.4～20.6mであるが、調査区南側では標高20.0～20.6mであった。これらは試掘調査のデータを追認するもので、旧地形が北から南にむかって傾斜し、河川跡がこれに沿って流れていたことを明かにした。

今回の調査で河川跡は西南に蛇行することが判明したが、試掘調査と同じく東側の河岸を検出することはできなかった。また、試掘調査で確認したAトレンチの「y=743.5付近での埋積土の立ち上がり」は、河川の流れの勢いが河岸を深くえぐり取ることによって

層位

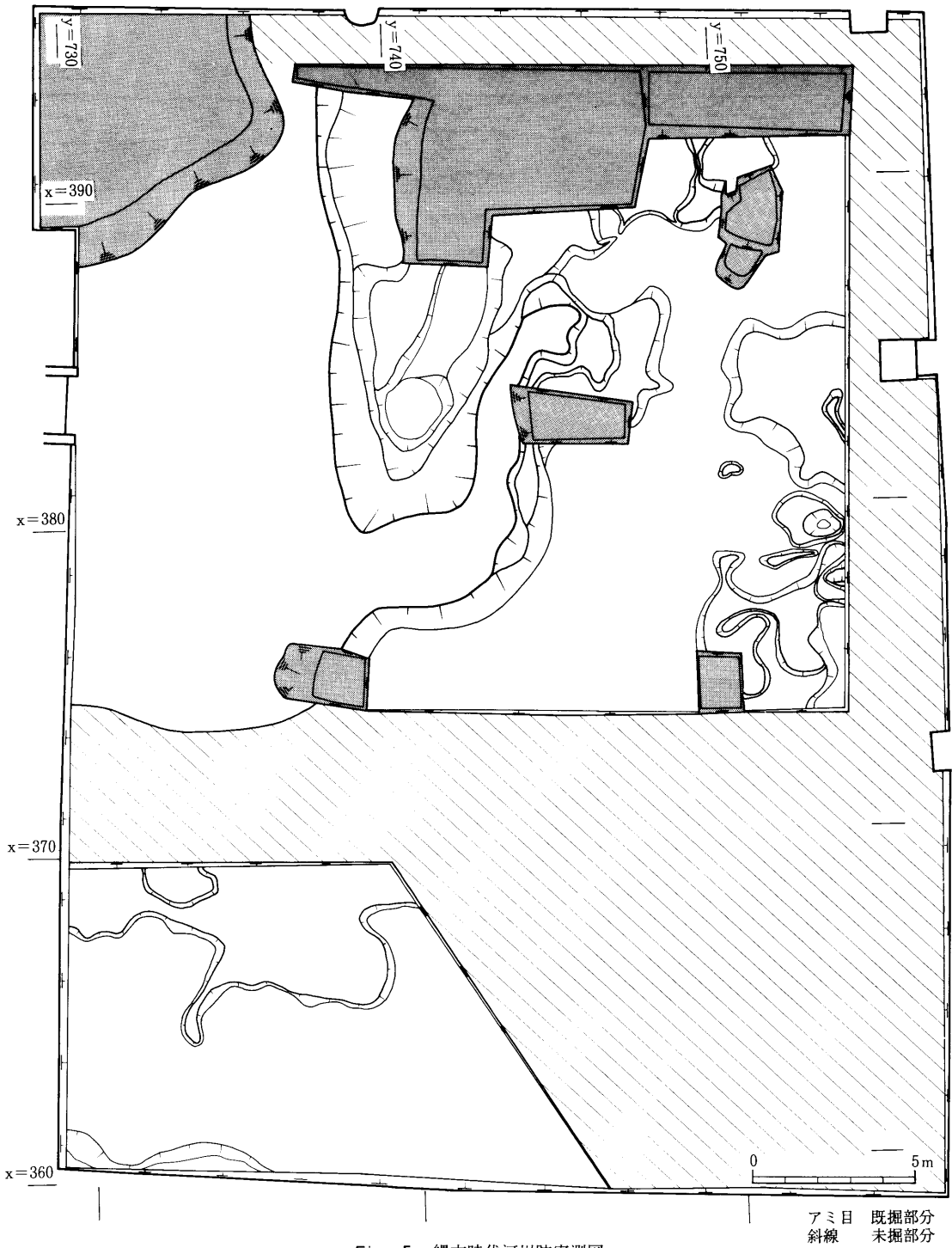


Fig. 5 縄文時代河川跡実測図

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査

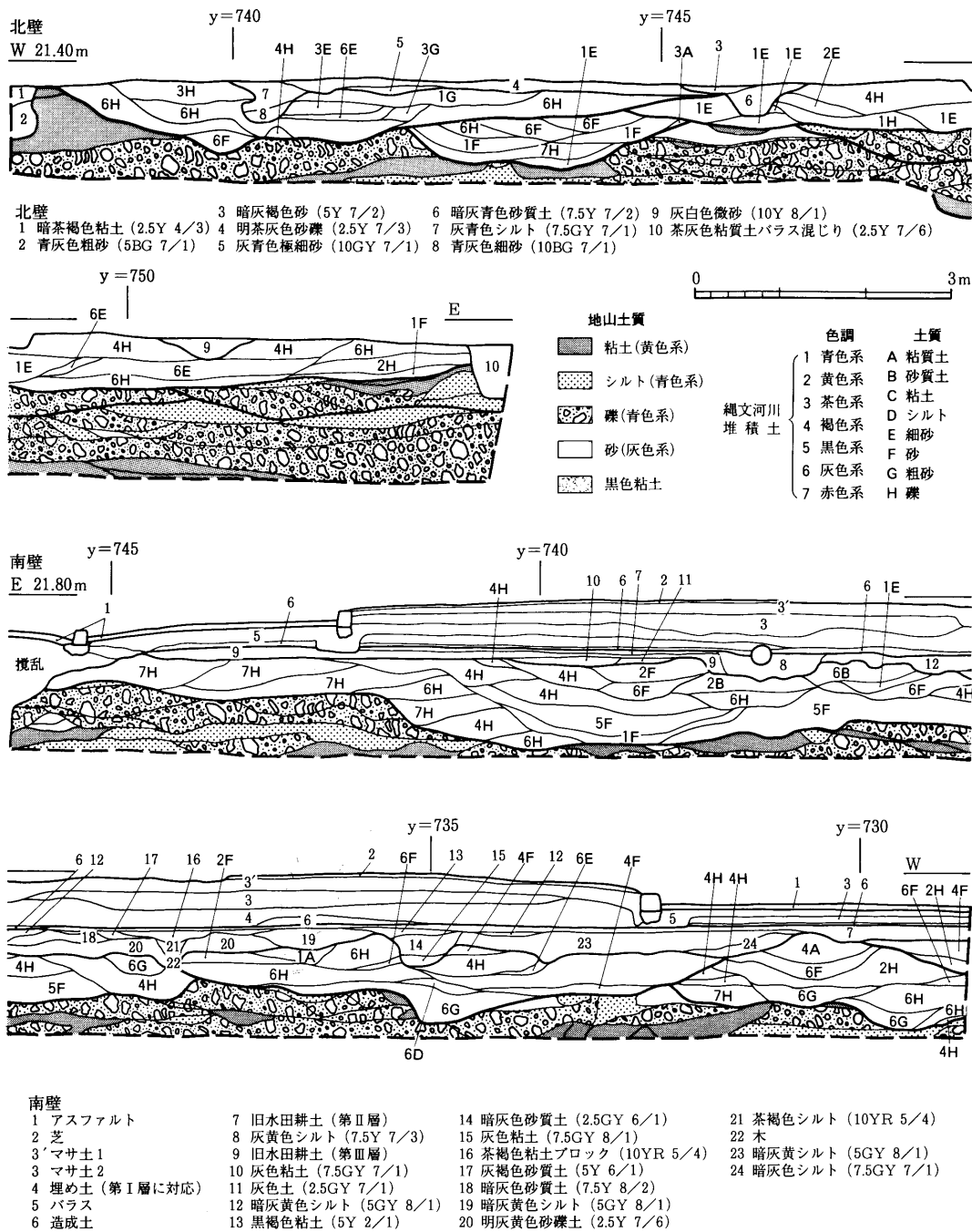


Fig. 6 縄文時代河川跡北壁・南壁土層断面図

層位

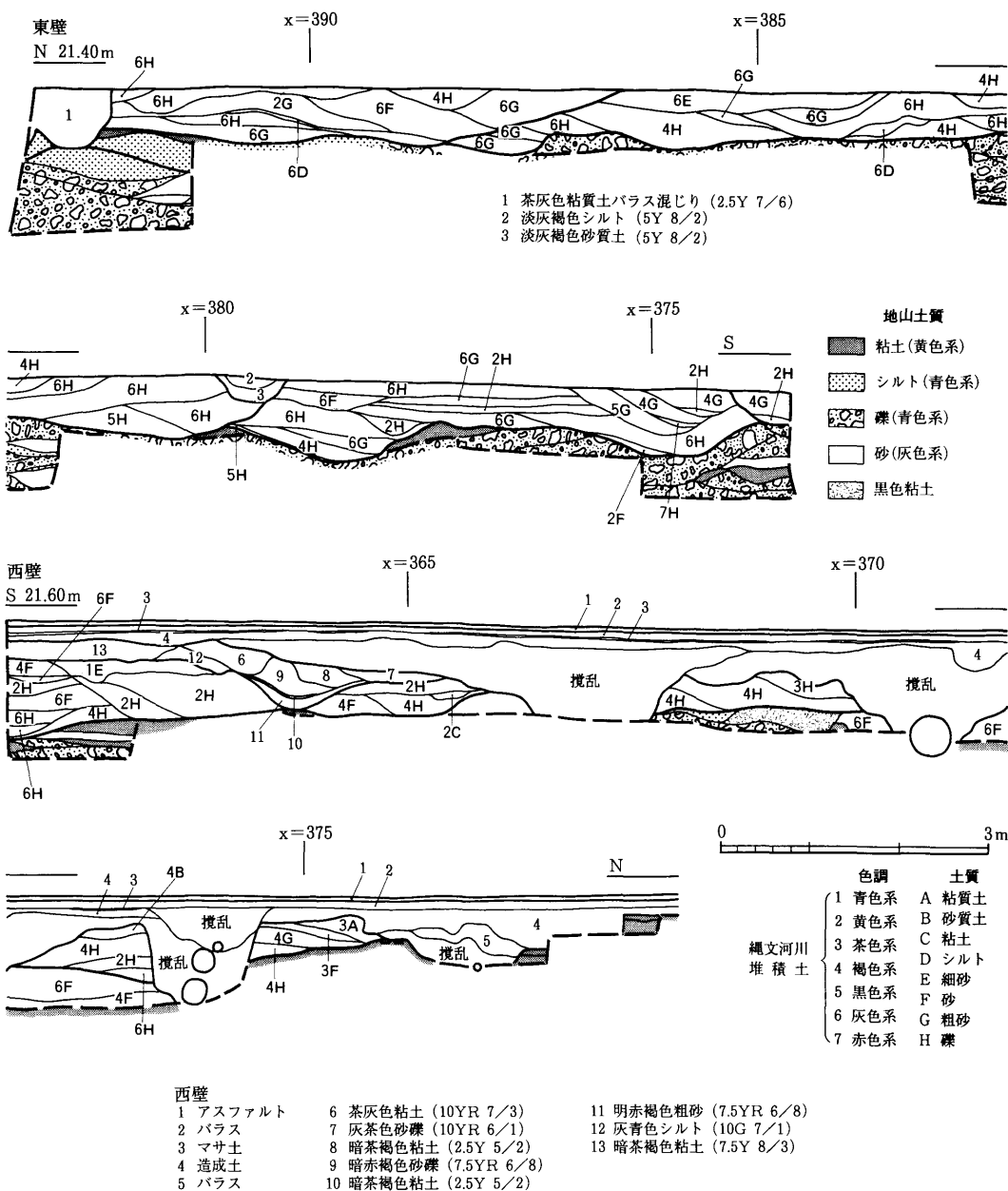


Fig. 7 縄文時代河川跡東壁・西壁土層断面図

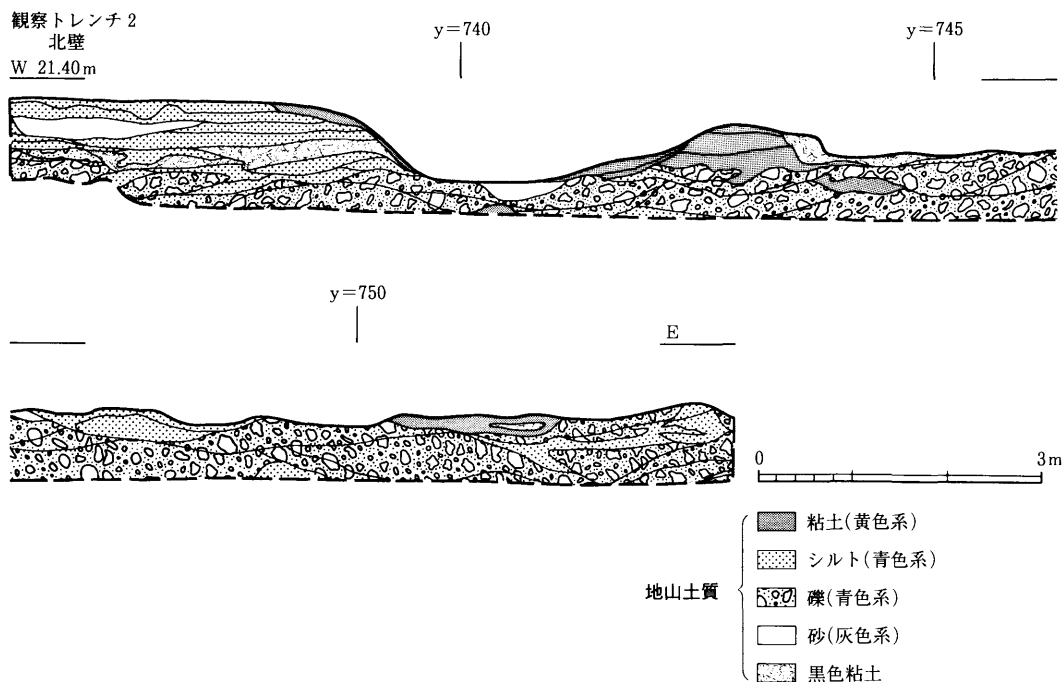


Fig. 8 縄文時代河川跡観察トレンチ 2 (突出部) 北壁土層断面図

形成した、岬状の突出部であった。

河川埋積土は試掘調査でも確認していたように砂および礫であったが、地山の確認で問題が生じた。試掘調査では河川検出面の地山と同じく、河床の地山もまた黄色あるいは黄褐色粘土と認識していた。今回の調査も試掘調査の認識をもとに、黄色粘土層を河床として砂礫の掘削を行った。調査区北側から河川跡の掘削を始め、砂礫層中に部分的な黒色系あるいは黄色系の粘土層が確認された。当初、この安定しない粘土層は河川の埋積土であると判断し、掘削を進めた。しかし、掘削の途中でこの粘土層の一部が、岬状の突出部に連なっていくことが判明した。北壁 (Fig.6, PL.5) の立ち割り及び、周囲の深掘り部分を精査した結果、河川の肩となる黄色粘土層は部分的にシルトや黒色粘土の互層で安定はせず、またこの粘土層の下層、河床の地山は青灰色砂礫と粘土の互層であることが判明した。

このため、安定した粘土層の検出を求めた河川跡北側1/6は、青灰色砂礫の地山を掘り抜いてしまっている。河川埋積土と砂礫の地山は、平面での区別が難しいため、岬状突出部 (Fig.8)、南壁 (Fig.6) について断ち割りをを行い地山の確認を行っている。また、当報告では、河床検出面の地山の土質をスクリントーンで表示した (Fig.9)。

縄文時代河川跡

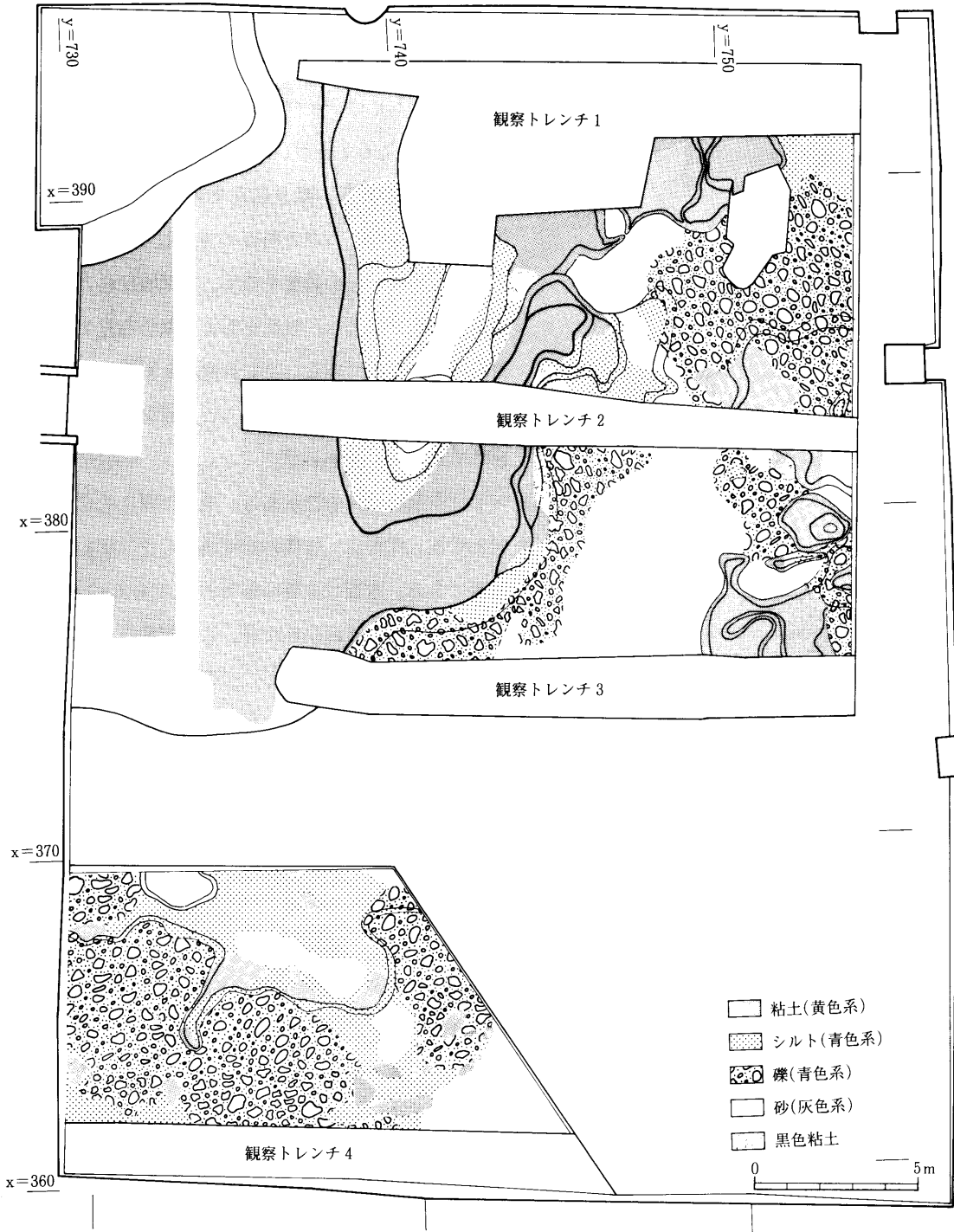


Fig. 9 縄文時代河川跡の河床面土質図

4 河川跡出土遺物

旧石器 (Fig.10-1・2・3, PL.8)

1は切出し形のナイフ型石器である。先端部をわずかに欠損するが、ほぼ完存。長さは約4.0cmと小型である。縦長剥片を素材とし二側縁を加工するが、素材と石器の主軸はずれる。右側縁は裏面からの調整を施す。左側縁は裏面からの調整を主とし、表裏両面より調整を施す対向剥離を行っている。左右両側縁とも調整加工は入念で素材の変形度は大きい。背面基部に自然面が残る。黒曜石製。

2は尖頭器の可能性ある。横長の剥片を素材とする。打面は、複数の剥離面からなる調整打面である。腹面は主要剥離面のみであるが、背面は4枚の剥離面からなる。この剥離作業により基部を横断面台形状に、先端部を横断面三角形状に加工する。先端部二側縁の調整加工は主要剥離面側から、弱い角度で行っている。先端は使用による摩滅があるので、錐として使用した可能性もある。サヌカイト製。1と2は全体の摩滅が激しく、上流からの流れ込みと考えられる。

3は不定形剥片。やや肉厚である。調整加工・使用痕などは認められないが、左側縁に折り取りがみられる。チャート製。1・2のように激しい摩滅を受けておらず、形態的にも旧石器としての決め手はないが、使用石材の上から、旧石器の可能性が指摘できる。

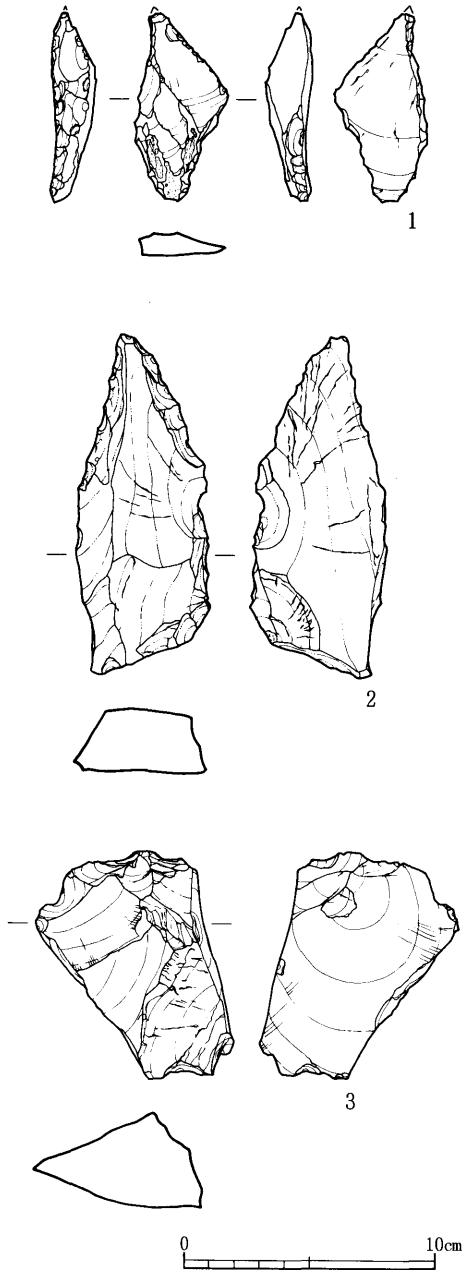


Fig. 10 縄文時代河川跡出土旧石器実測図

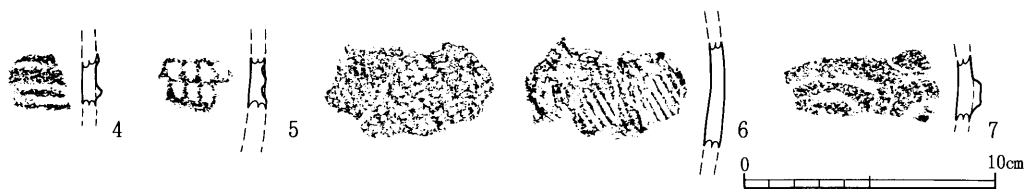


Fig. 11 縄文時代河川跡出土晩期以前土器実測図

縄文土器晩期以前 (Fig.11-4~7, PL.9)

4は外面に、断面三角形の隆帯を張り付ける。隆帯は幅4mm、厚さ2.5mmと細く、現破片では2条まで確認できる。破片は小さく、内外面ともに風化しているため、条痕調整の有無は確認できない。外面に隆帯をめぐるさせる特徴から、縄文時代前期の轟B式系統の土器と考えられる。轟B式系統の土器は、山口市内では吉田遺跡より直線距離にして5kmの宮野屋敷遺跡³⁾から出土している。ただし、内面に条痕が観察できなかったことを問題とするならば、中期の船元Ⅱ式のなかに隆帯をもつものがあり、注意を要する。

5は外面に、連続刺突文を有する。現破片で2段に刺突文が連なるのを確認できるが、それ以上にめぐっていた可能性がある。刺突文の一単位は、直径約5mmの円形を呈する。工具を右斜め下方から挿入して、施文している。内面は風化している。外面に煤が付着する。刺突文を施す山口県内の縄文土器として、前期の月崎下層Ⅱと後期の月崎上層Ⅰとが挙げられる。5の刺突文が多段構成であるという点から、前期の月崎下層Ⅱとの関連を考えたい。ただし、月崎下層Ⅱの刺突文は、押引きの手法をとる場合が多く、5の刺突文はこの手法ではない。また、中期の船元Ⅱ～Ⅲ式には刺突文を施すものがあり、4と同様に注意を要する。

6は外面に縄文、内面に条痕を施す破片である。外面の縄文はLR。内面の条痕は2枚貝によるものと考えられる。外面に煤が付着する。中期の船元Ⅱ～Ⅲ式と考えられる。内面に条痕をもつ船元系の土器は北部九州に見られ⁴⁾、本州では山陰地方に散見される⁵⁾。

7は外面に弧状の隆帯を張り付けるもの。隆帯は幅約1cm、厚さ約3mmと幅広い。内外面は風化する。時期及び型式名は不明である。可能性として、船元Ⅲ式に伴う南九州系の春日式⁶⁾が考えられる。

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査

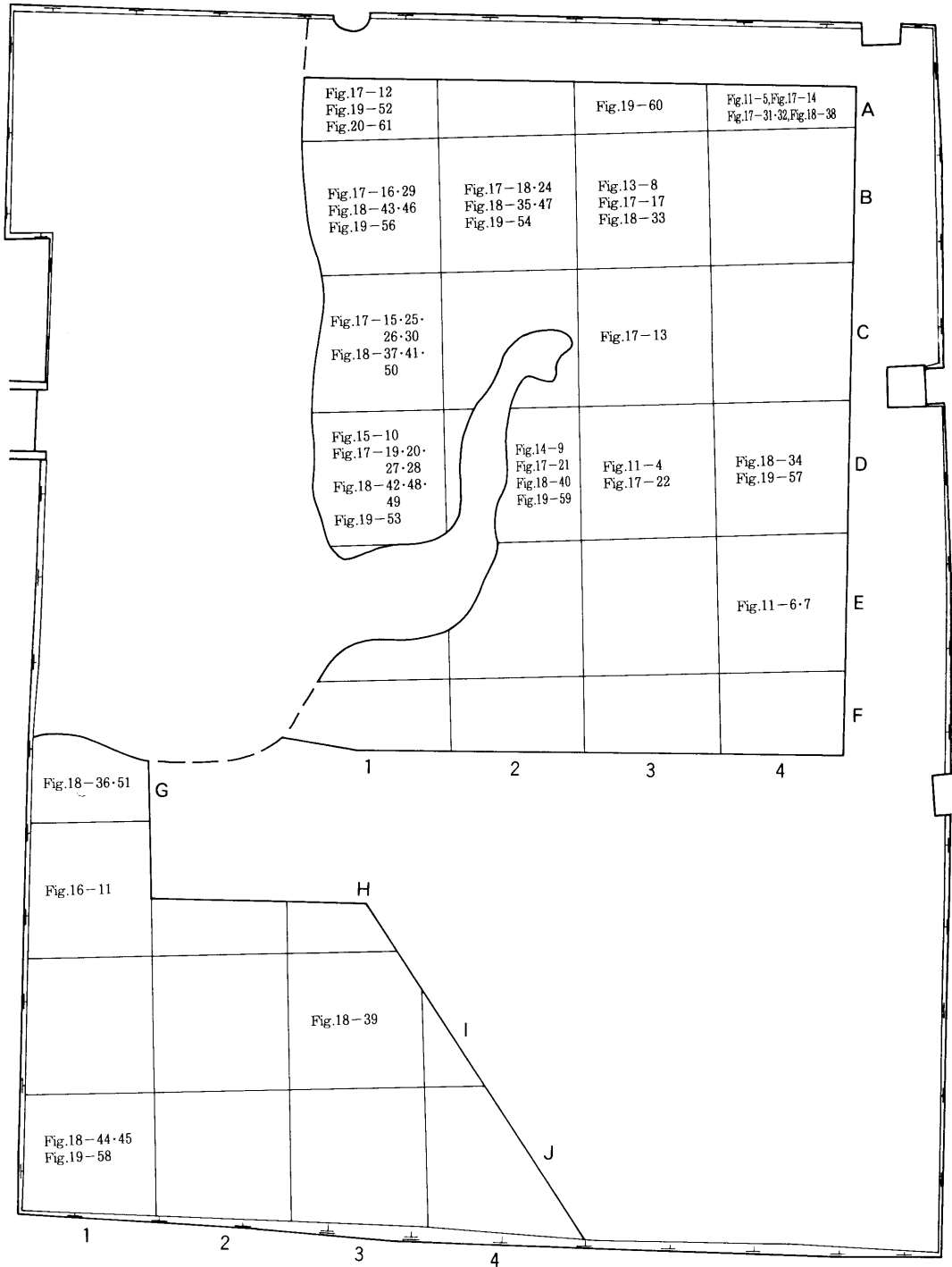


Fig. 12 縄文時代河川跡の土器出土地点図

縄文時代晩期土器

本節では、河川が開口していたと考えられる縄文時代晩期の土器に関する記述を行うが、その前に調査時における遺物の取り上げ方法を明記しておく。

「1 調査の経過」で述べたように、本河川跡の掘削は機械力をもって行っている。無論、河岸及び河床は直前で機械を止め、その後の検出は人力である。試掘調査で明かとなっていた遺物量に対する時間と労力を考えれば、機械力の導入は適切な処置であったと考えている。しかし、機械力の掘削とはいえ、遺物の出土地点を把握するため最大限の注意を払った。一回の掘削する範囲を4 m×4 mに限定し、掘削した河川埋積土は全て目を通し、遺物の俊別を行った。本報告掲載土器に関してその出土地点の表示を行ったのが (Fig.12) である。

本来ならば、河川跡出土全土器に関して個体数あるいは重量で表示を行うべきである。しかし、個体数は識別が困難であるとともに、個体によって破片の大小の差が著しいため、その表示には不均衡が生ずる恐れがあった。重量表示は試掘調査分がすでに石膏を入れており断念した。ただし、今回の報告は主要な土器片をほとんど掲載しており、全体的な傾向は示している。また、調査区の2/3を占める河川跡は、その土層断面からも一時期の河幅とは考え難い。時期の異なる新旧の流路が、それぞれ切り重なって発掘調査での検出状態となっていると考えられる。平面でその切り合を判断することは不可能なため、各地点における土器の型式差から判断を試みる。

全体的な傾向として、西岸近くでの土器片集中が窺える。特に、岬状に突出した部分の内側は集中区である。本流から外れ流れが滞る場所なので、上流からの遺物の堆積があって当然といえる。しかし、出土する破片は大きく、摩滅の少ないものも見受けられる。岬状突出部の内側から出土した土器 (Fig.15-10) や、外側ではあるが岬状突出部の肩にへばりつくようにして出土した土器 (Fig.14-9) は、口縁から胴上半部が1/4ほど残存している。単に上流から流されてきただけとは考えられず、本流から外れたこの場所が、縄文時代晩期における水の利用場所となっていた可能性がある。

これに対して、河川跡の中央あるいは、東岸付近と推定される調査区東側では土器量が少なく、また出土する土器も縄文晩期以前のもの (Fig.11-5・6・7) が含まれている。上流の包含層から流されてきた可能性もあり、にわかには河川跡の上限を遡らせることはできない。ただし、西岸でこの河川跡の最も新しい遺物と考えられる夜臼系壺形土器片 (Fig.20-61) が出土していることを踏まえるならば、流路は東側が古く西側が新しいと考えることは可能である。

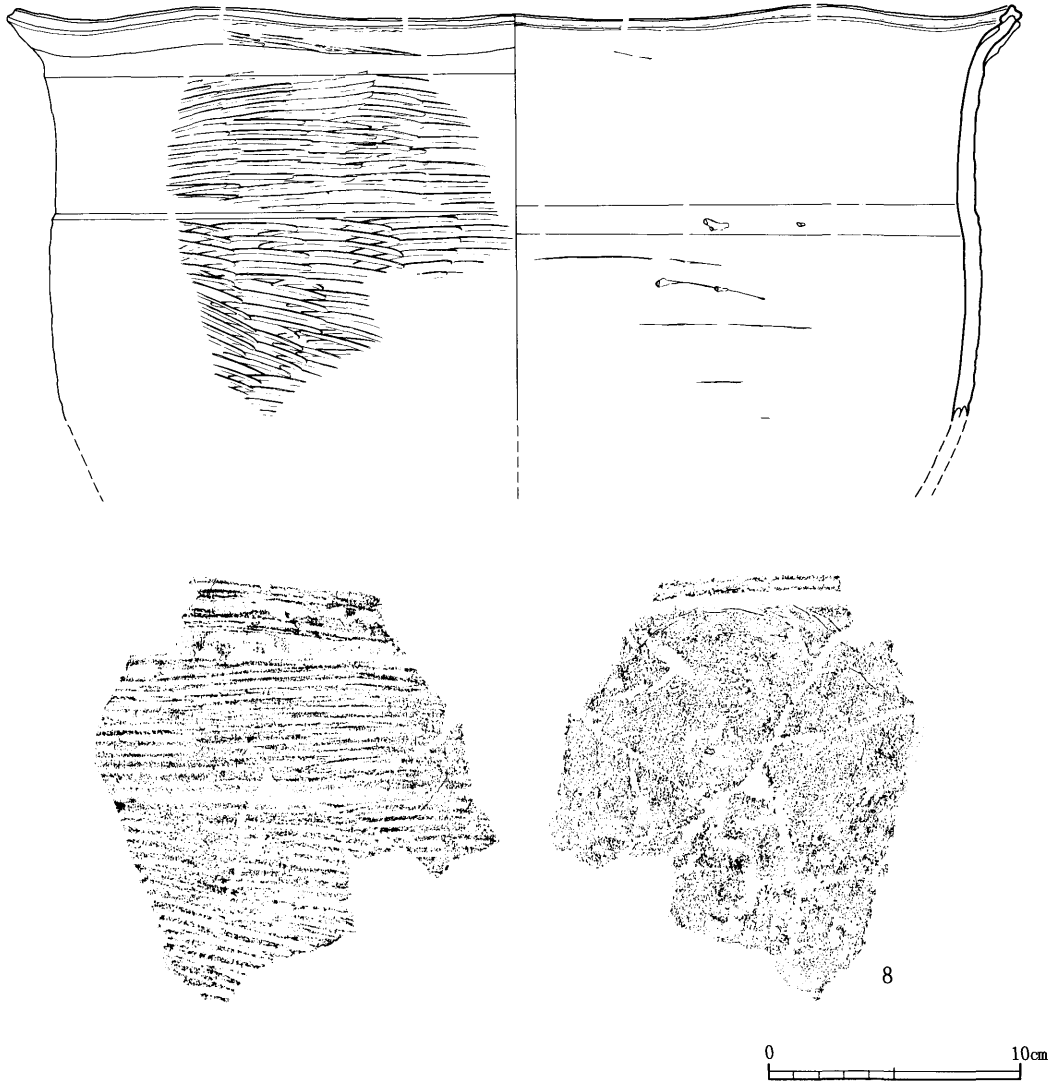


Fig. 13 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(1)

深鉢形土器B類 (Fig.13-8, PL.10)

8は胴部に対し、頸部をややすぼめることによって肩部を表現する。口縁部と頸部の境は指で強くナデられ、稜をもって口縁部は外反する。口縁部内面は、粘土の折り返しが段を形成し沈線状にめぐる。口縁部端面は、ヨコナデによってくぼむ。外面には全面に二枚貝の条痕が、右から左方向に施される。ただし、口縁部と頸部の境は、指ナデによって条痕が消されている。内面は左方向へのケズリ後にナデが施される。その形態の特徴は、いわゆる岩田第四類土器Cそのものである。本報告では、これをB類とする。

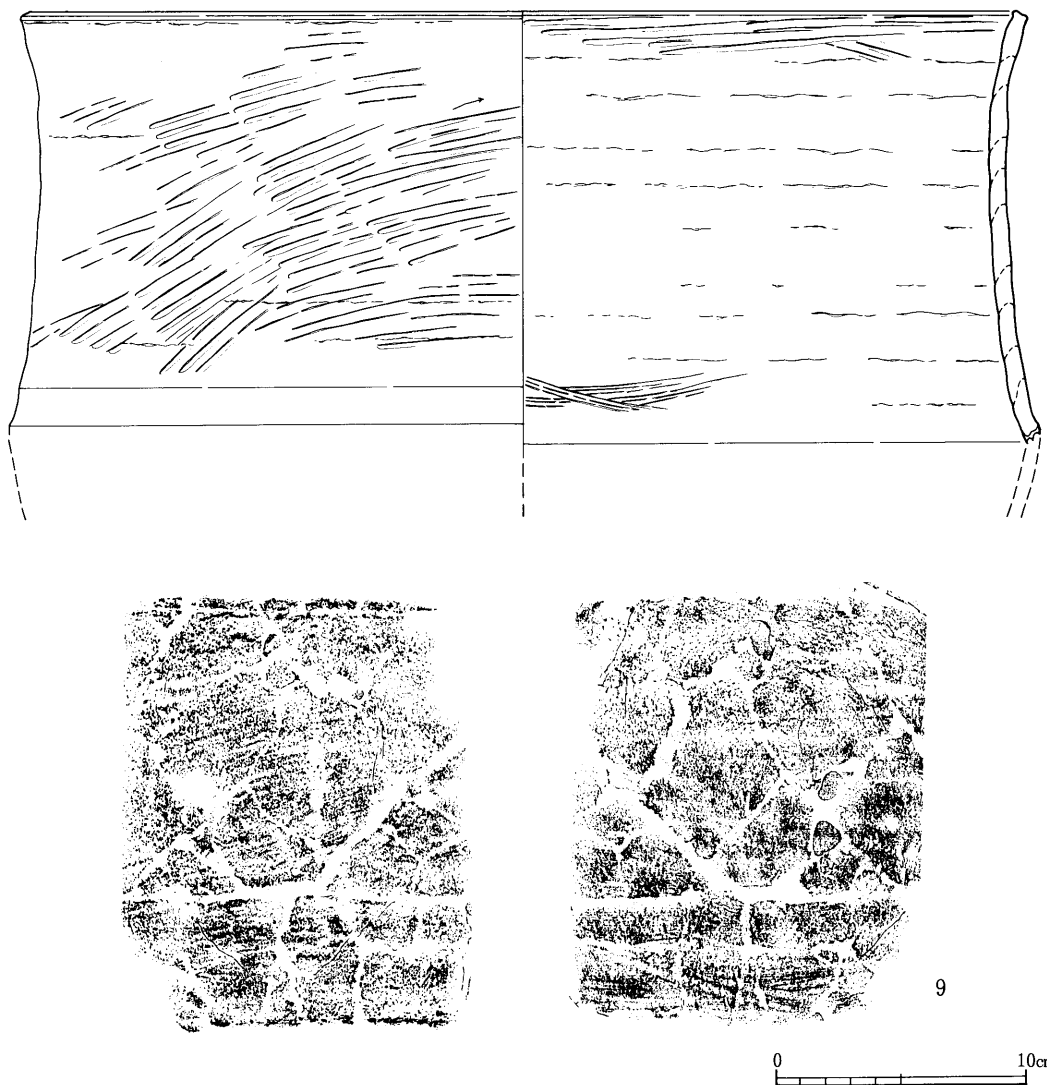


Fig. 14 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(2)

深鉢形土器C 1類 (Fig.14-9, PL.11)

9の口縁形態はB類とは異なり、単純に立ち上がるものである。本報告では、この口縁形態をとるものをC類とする。また、口縁端部におけるキザミの有無で、C 1類とC 2類に区別する。本例は、キザミをもたないC 1類である。

比較的長く内傾した口頸部と、屈曲した肩部をもつ。口縁端面は、ヨコナデによってくぼむ。外面と内面の口縁部付近に条痕が施される。条痕はその凹みに条線を確認することができ、巻き貝を原体としている可能性がある。復元口径は、約40.0cmである。

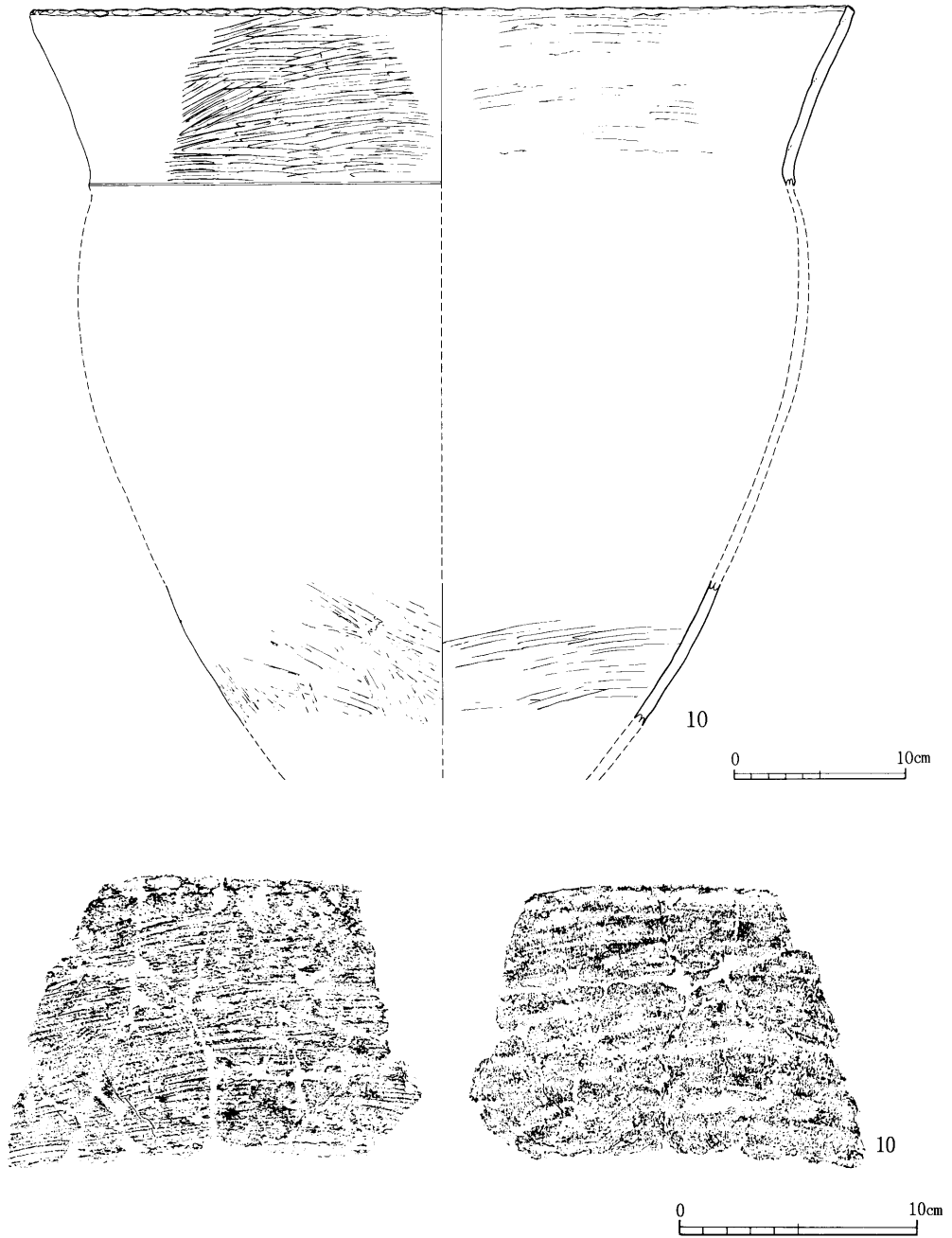


Fig. 15 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(3)

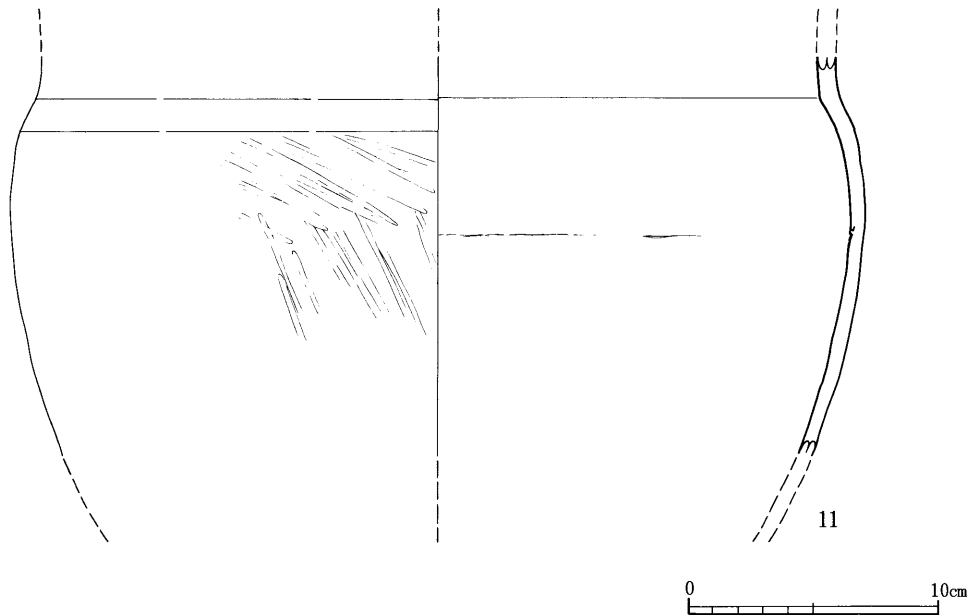


Fig. 16 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(4)

深鉢形土器C 2類 (Fig.15-10, PL.12)

10は口縁部端面にキザミをもつC 2類である。キザミは長さ1.0~1.5cmの長楕円状押圧である。口頸部は大きく外反する。頸部と胴部の境は、強いヨコナデにより稜をもって屈曲する。胴部破片はその傾きが口頸部の傾きと一致しないため、胴下半部として図上復元した。しかし、口頸部の破片と胴部の破片は接して出土しており、出土状況からはこの間にはいるような破片は見いだせなかった。長胴の深鉢形土器として復元しているが、胴下半部としている破片が口頸部とただちに接合し、寸のつまった器形になる可能性も残されている。外面は口頸部に二枚貝を原体とする条痕が施される。胴部は粗いケズリであるが、その工具は判然としない。内面はナデられるが、口縁部や胴部に条痕がわずかに残る。復元口径は、約48.0cmである。なお、口頸部外面には「吹きこぼれ」と思われる煤が多量に付着している。

深鉢形土器D類 (Fig.16-11, PL.13)

11は頸部を直立させて復元したが、全体的に器形が開いた浅鉢状の器形を呈する可能性もある。器面の調整はミガキであり、胎土にも微砂粒を多量に混え、他の深鉢形土器とは異なる。外面に煤が付着する。口縁形態は不明であるが、あらゆる点において他の深鉢形土器とは異なるためD類と位置づけた。

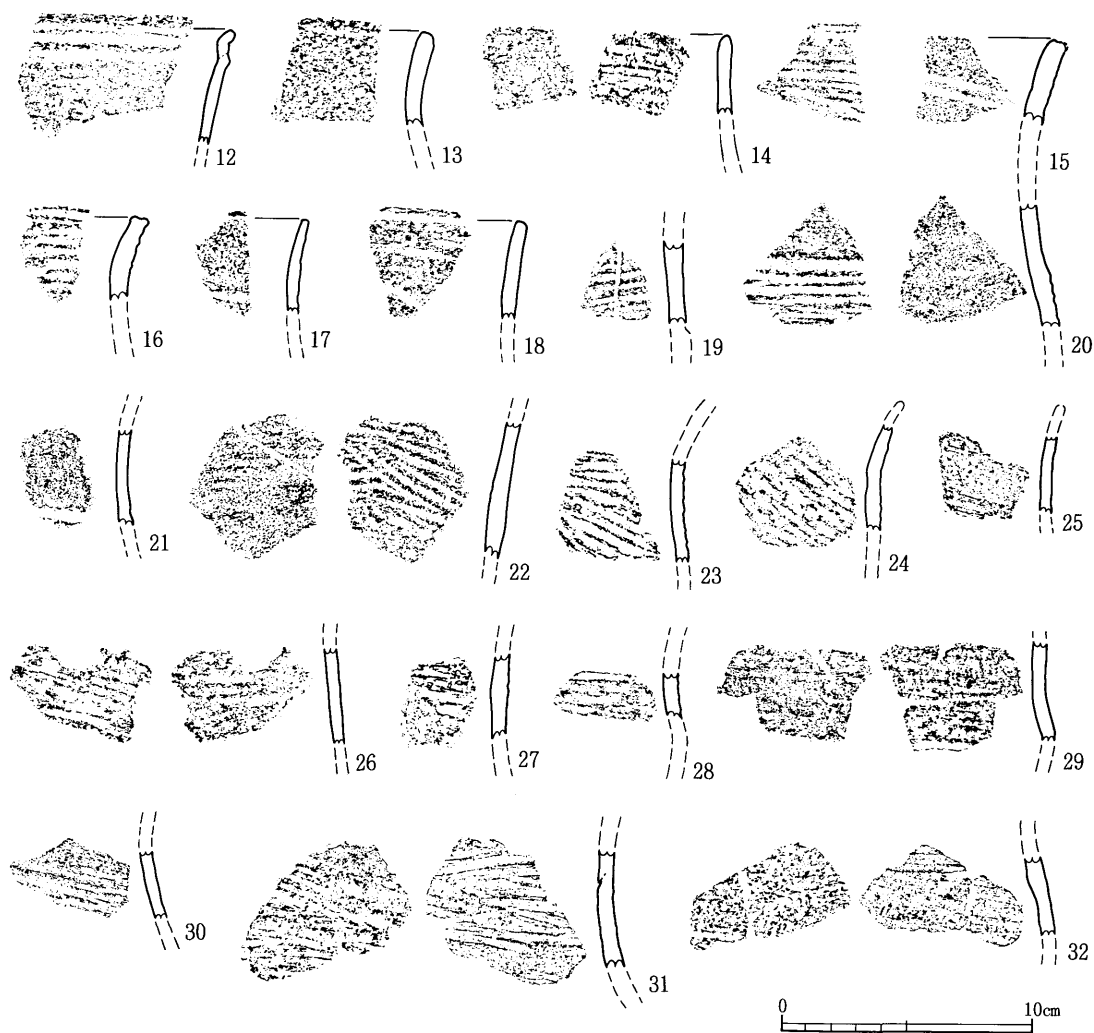


Fig. 17 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(5)

縄文晩期土器口頸部 (Fig.17-12~32, PL.14・15)

拓本による表示が可能な、口頸部の破片を一括した。このうち口縁端部まで残存するものについては、その形態により分類が可能である。

深鉢形土器A類 (Fig.17-12)

外方につまみ出した擬口縁に、さらに粘土紐を積み上げ、粘土紐の端部を外面に折り返す。この成形技法により、2段に屈曲した口縁形態を呈する。この特徴は、岩田三類aと類似する。本報告では、これをA類とする。外面の調整は条痕後ナデ、内面の調整はナデである。条痕の原体は、識別不可能である。器壁は極めて薄い。

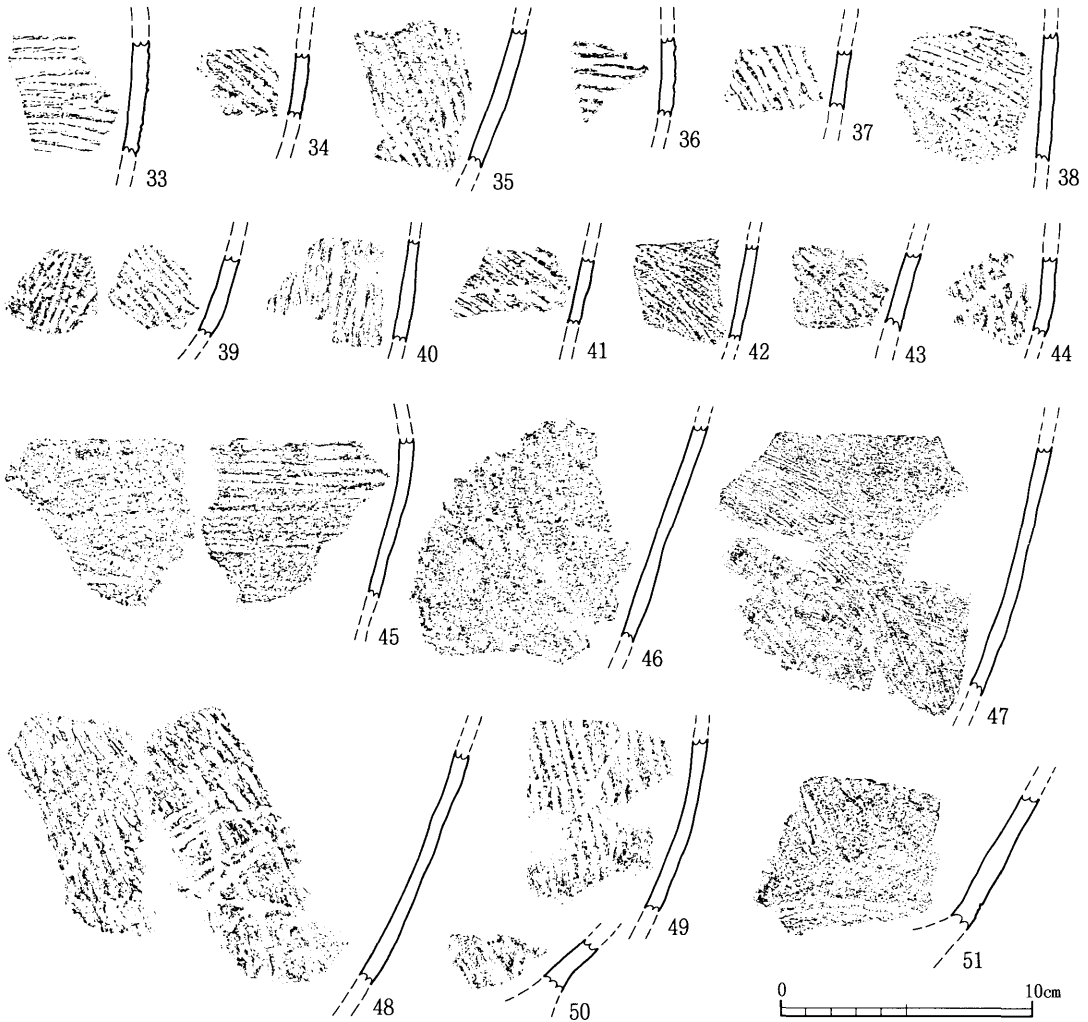


Fig. 18 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(6)

深鉢形土器C 1類 (Fig.17-13~18)

13・14は口縁部を丸く収める。15・16・17・18は口縁端部に面をもち、そのうち15・16・18は施されるナデが強いために、凹線状にくぼんでいる。20は15と同一個体の可能性が強い。19は頸部にヘラ描き文と、頸胴部に沈線を有する。

縄文晩期土器胴部片 (Fig.18-33~51, PL.17・18)

33は8と同一個体の可能性がある。34・35は外面に左上がりの条痕が施される。40の外面条痕原体は、禾本科植物と考えられる。41・42は外面条痕の凹みに、さらに条線が観察でき、条痕原体は巻き貝である可能性が強い。46は内外面ともケズリ後ナデ。

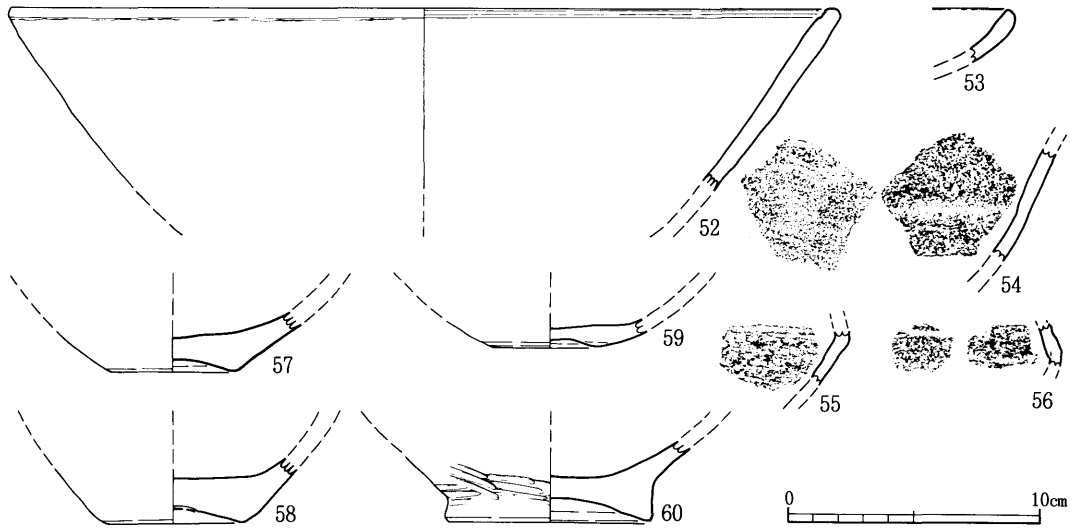


Fig. 19 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(7)

浅鉢形土器 (Fig.19-52~56, PL.18)

52は直口の浅鉢である。胴部の傾斜は強く、直線的に立ち上がる。口縁端部を丸く収めるが、外面には稜線をもち、内面に一条の沈線が施される。内外面風化するが、内面に一部ミガキが残る。胎土は1mm前後の砂粒を、多量に混じえている。復元口径は、約33.0cmである。53も直口の浅鉢である。口縁端部は丸く収めるが、内面に鋭い稜線をもつ。極めて小片で、風化も激しい。

54は口頸部が大きく開く浅鉢である。口縁部を欠くため、形態は不明である。外面の変化は乏しいが、内面には屈曲部をかすかに残す。外面にミガキ痕を残すが、内面の調整は確認できなかった。

55・56は胴部が、くの字に屈曲する浅鉢である。55の外面下半調整は、ケズリ後ナデである。内面の調整は風化のため、観察が不可能である。56は破片の外面上端部に、低い台形状の突出部が巡る。突出部の下端は、浅く幅の狭い凹線によって区画される。

底部 (Fig.19-57~60, PL.19)

57・58は底部が、胴部に向かって直線的に立ち上がるもの。底面はくぼみ、器壁は肉厚である。内外面は風化が激しく、調整は観察不可能である。

59は他の底部と比較して、器壁が薄く胴部の立ち上がりは緩やかである。底面には高台状に、粘土紐の輪を貼り付ける。他の底部との間に著しい形態差があり、浅鉢形土器底部の可能性はある。

60は底面が胴部より突出している。底面はくぼむ。底面側面に条痕が螺旋状に施される。条痕のくぼみに条線があり、巻貝を原体とする可能性



Fig. 20 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(8)

壺形土器 (Fig.20-61, PL.13)

61は最大長6.0cm、最大幅2.5cmと小さな土器片である。外面には幅約1.5mmのヘラ描き沈線が一条施されている。この沈線を境にして破片の上端は内側に傾き、破片の下端は外側に張り出す。外面の調整は沈線が施された後に、ミガキが施される。内面の調整は器面にかすかな凹凸があることから、条痕による成形後ナデが施されたものと考えられる。当破片は以下の理由により、夜臼系壺形土器の頸胴部片であると断定する。

外面のヘラ描き沈線を水平にして導きだした破片の傾きから、頸部は上に向かってすぼまり、胴部の張った器形の肩部分であると想定される。ヘラ描き沈線は、頸部と胴部の境に区画として施されているのである。頸胴間をヘラ描き沈線によって区画する手法は、縄文時代晩期後半の土器に精製・粗製を問わず見受けられる。そして外面に施された丁寧なミガキから、この破片が浅鉢形土器・壺形土器などの精製器種に属することがわかる。ただし、上述の傾きから想定しうる器形は晩期浅鉢形土器のなかにはない。その器形はいわゆる壺形であり、縄文時代晩期に同じものを求めるとするならば夜臼式の壺形土器を想定せざるをえない。

特に注目すべきは、そのヘラ描き沈線の手法である。沈線をよく観察すると、器面に対してヘラ原体が垂直ではなく、やや斜め下方向からあたっていることが窺える。ちょうど胴部の上端を削るようにして、頸胴部界に沈線がえぐりこまれている。そして、このヘラ描き沈線が文様であるかといえ、そうではない。沈線はミガキの前に施されており、ミガキ調整の際にはつぶされている。むしろ、意識的に沈線部分を磨き締め、段状に整形した可能性がある。

この手法は、愛媛県道後今市遺跡⁸⁾、実見していないが香川県林・坊城遺跡⁹⁾などで出土している夜臼系壺形土器の区画沈線手法と共通するものである。ただし、連合獣河川跡から出土した、深鉢形土器はいずれも凸帯文土器出現以前のもので、夜臼系壺形土器との間には若干時間差がある。

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査

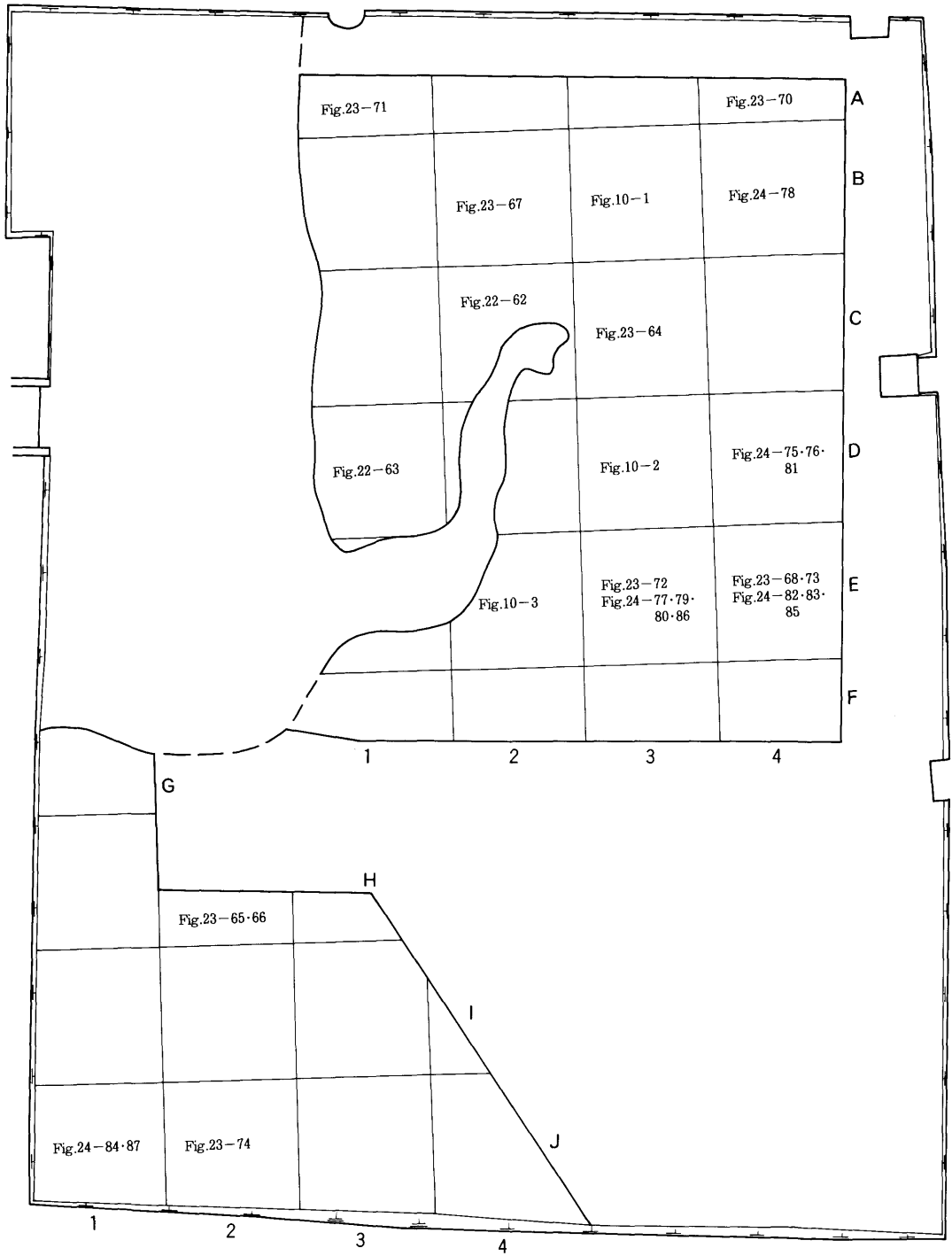


Fig. 21 縄文時代河川跡の石器出土地点図

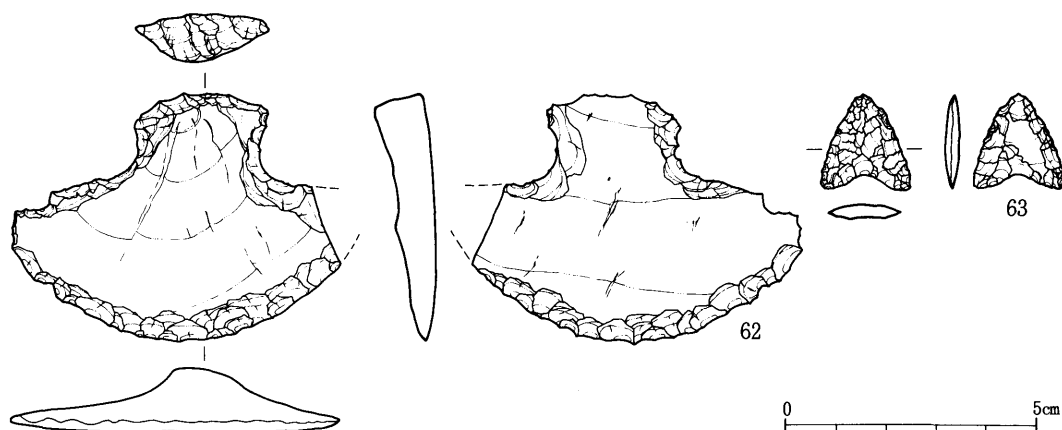


Fig. 22 縄文時代河川跡出土石器実測図(1)

石器 (Fig.22・23・24, PL.20・21)

西岸及び岬状突出部付近から出土する土器片に対して、剥片は土器片の少ない調査区東側から多く出土している。これは単純に土器片に対する剥片の比重の大きさを示すと考えられる。上流から流されてきた土器片・剥片が、比重の軽い土器はより下流に流され、比重の重い剥片は調査区付近に堆積したことが想定される。

これら剥片に対し、石匙 (Fig.22-62) や石鏃 (Fig.22-63) などの製品は、岬状突出部付近からの出土である。石匙の帰属時期に問題が残るものの、土器と同様に岬状突出部付近から製品が出土していることに注意が払われる。縄文時代晩期における水の利用場所となっていた可能性を補強する材料となる。

石匙 (Fig.22-62, PL.20)

62は横型の石匙である。刃部両端部を僅かに欠く。背面には素材剥片のポジティブな面をほぼ完全に残しており、バルブの膨らみもみられる。このことから、素材剥片の形を生かしながら、上部より2カ所の抉り込みを入れることにより、外形を整えたと思われる。つまみ部上端は裏面より、他の縁辺部は両面から調整を施している。特に刃部は丁寧に調整し、整った半月形に仕上げている。サヌカイト製である。

石鏃 (Fig.22-63, PL.20)

63は凹基無茎式の石鏃である。形態は正三角形に近く、基部の抉りは浅い。脚端部は尖り、両側縁は弯曲する。腹面の中央部に、素材面を残す。両面を細かい調整により仕上げられており、特に背面では丁寧に調整されている。メノウ製である。

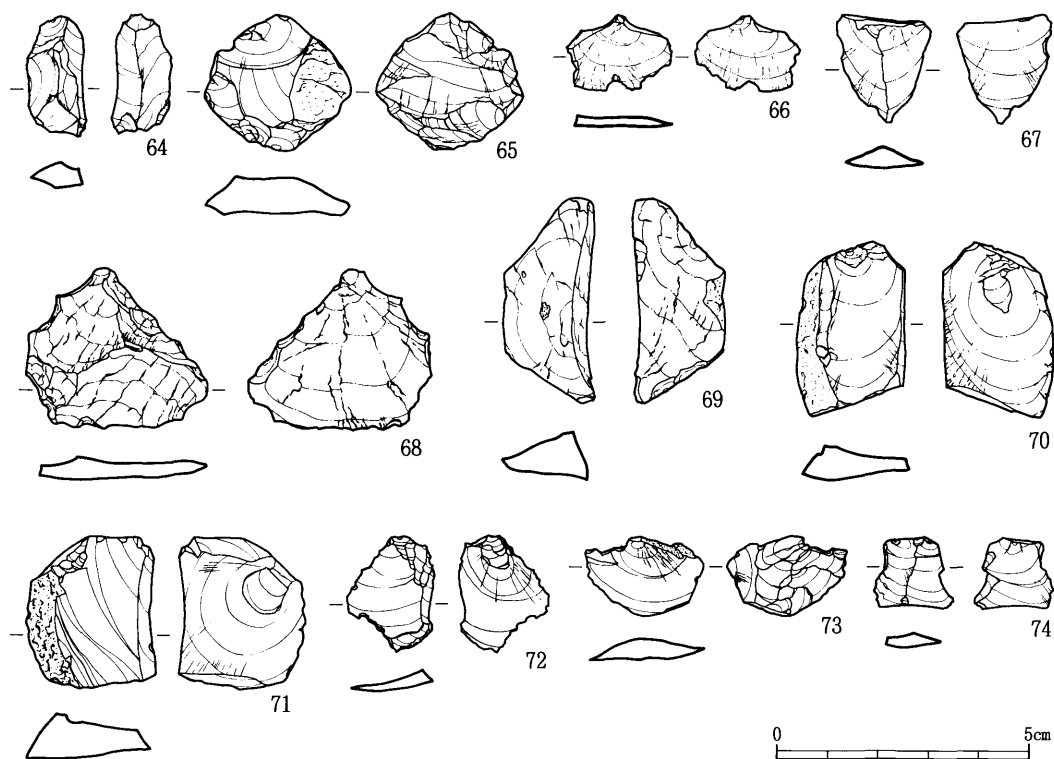


Fig. 23 縄文時代河川跡出土石器実測図(2)

剥片 (Fig.23・24-64~87, PL.20・21)

剥片の石材は、水晶、サヌカイト、流紋岩、頁岩、黒曜石、の5種類である。石材ごとにまとめて記述を行う。

水晶 (Fig.23-64・65, PL.20)

64・65は水晶を石材とする。この他に、本河川跡からは水晶の原石 (PL.20) が出土している。

サヌカイト (Fig.23-66・67, PL.20)

66・67ともに小さな碎片である。本河川跡におけるサヌカイトの出土頻度は極めて低い。

流紋岩 (Fig.23-68・69, PL.20)

68・69ともに二次加工および使用痕は認められない。

頁岩 (Fig.23-70, PL.20)

70は左側縁部に自然面を残す。腹面にはバルブ及びバルバー・スカーが顕著である。

黒曜石 (Fig.23-71~87, PL.21)

75~87の石材は、灰色を呈する不純物の多い姫島産黒曜石。他は漆黒色を呈する。

河川跡出土遺物

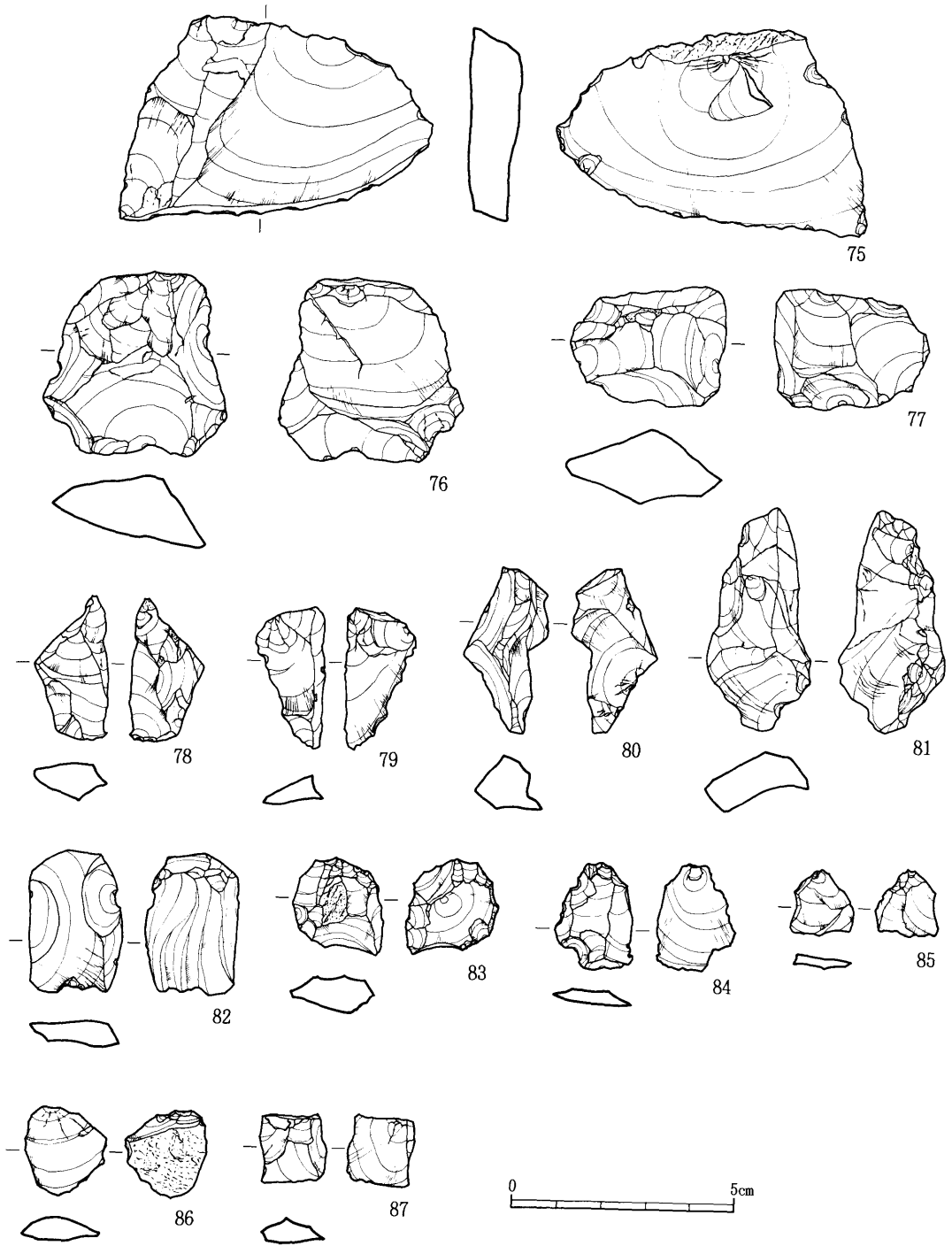


Fig. 24 縄文時代河川跡出土石器実測図(3)

5 近世遺構・遺物

縄文河川跡と同じ検出面で、河川跡の埋土を遺構面として近世遺構が検出されている。遺構は水田に伴う暗渠と、溜池状の土壌である。水田そのものは検出されず、大学造成時に削平されたものと考えられる。暗渠も削平により、検出できなかつた箇所がある。これらの遺構の一部は、補修を受け大学統合移転まで、機能していたものと考えられる。

暗渠 (Fig.25, PL.7)

1号暗渠は、調査区北半の中央で南北方向に検出されている。その主軸は構内座標のy軸に対して、約10度西に振れる。検出した暗渠の長さは約12.5mで、幅約50cmである。検出面の標高は北側21.15m、南側20.9mで、暗渠底面の標高は約20.85mである。暗渠は調査区南半にも続いていたと考えられるが、配管などの攪乱により検出することはできなかった。ただし、南壁ではこの1号暗渠より、約6mほど西にずれてy=738付近で暗渠断面を検出している。底面では排水管の役目をしたとおぼしき木片が検出されたが、遺存状態は極めて劣悪であった。遺物は検出されなかつた。

2号暗渠は、調査区北端で東西方向に検出されている。その主軸は構内座標のx軸に対して、約3度北に振れる。検出した暗渠の長さは約14.0mで、幅約50cmである。暗渠はy=748.5付近で北に分岐し、調査区外へと続く。また、東側も調査区外へと続く。検出面の標高は約21.15mで、暗渠底面の標高は約21.0mである。2号暗渠の西端では、長さ2mにわたって5連に並んだ陶製の土管を検出している。最も西側の土管は、中央で上部に口を垂直に突き出したL字形を呈している。水田の排水を行っていたと考えられる。遺物は検出されなかつた。なお、1号暗渠と2号暗渠は交わっていたものと考えられるが、攪乱のため、その箇所は検出できなかった。

近世土壌 (Fig.25・26, PL.7)

近世土壌は、調査区の南西端で検出された溜池状の遺構である。土壌は縄文河川埋土の砂礫を基盤として掘り込まれている。平面形態は長楕円状を呈し、長軸4.0m、短軸3.5mを測る。検出面の標高は約20.8mである。土壌底面の標高は約20.3mである。土壌の南肩は、多数の木杭を打ち込んで補強している。

層位 (Fig.26) は、大きく3層に分かれる。上層は植物混じりの粘土層、中層は砂礫が混入した粘土層、下層は砂礫層である。上層の植物を含んだ粘土の堆積状況は、この土壌が長い滞水状態にあり、徐々に埋没したことを示している。これらのことより、水田に伴う溜池施設と判断した。土壌内からは近世陶器などが出土している。

近世遺構

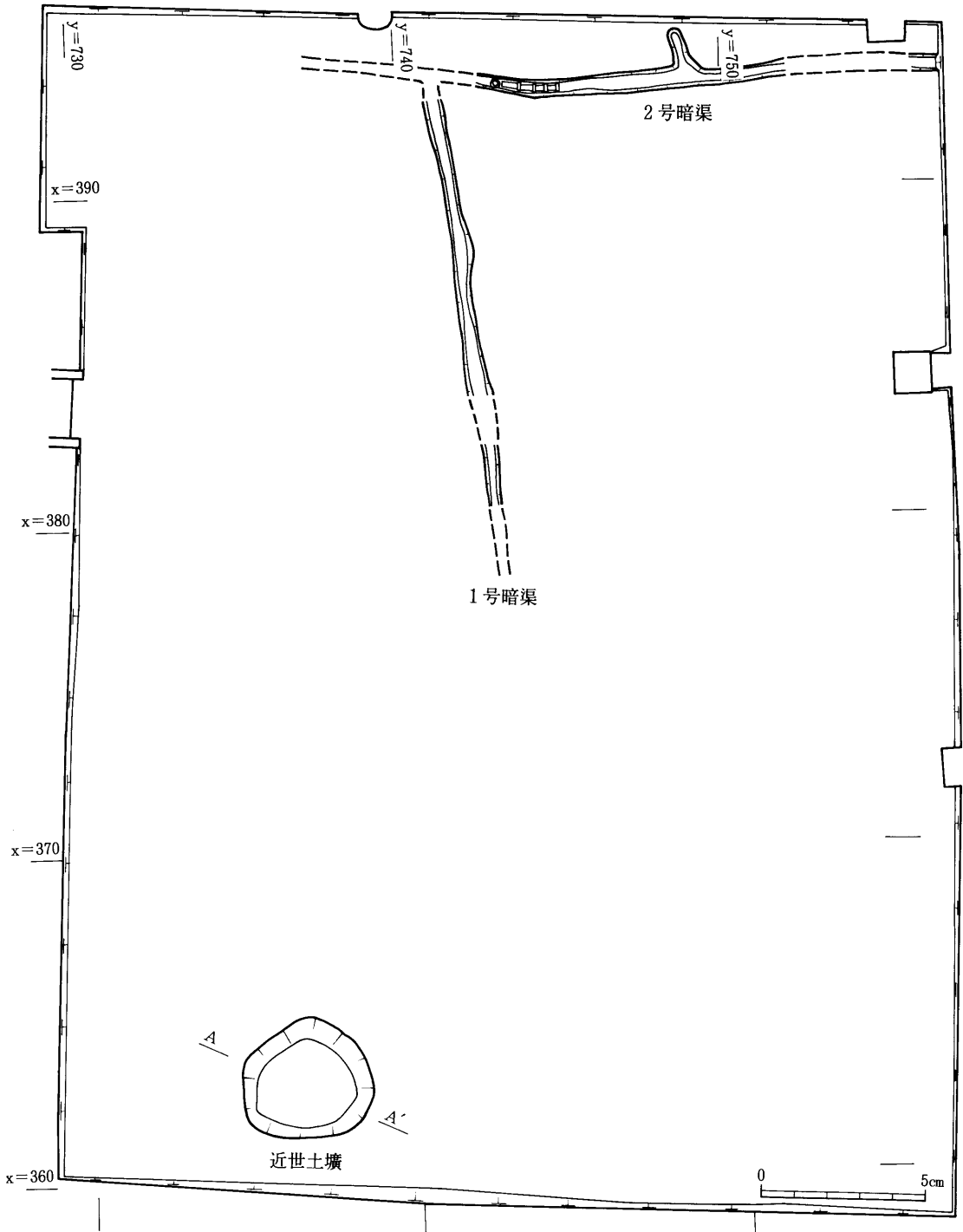


Fig. 25 近世遺構配置図

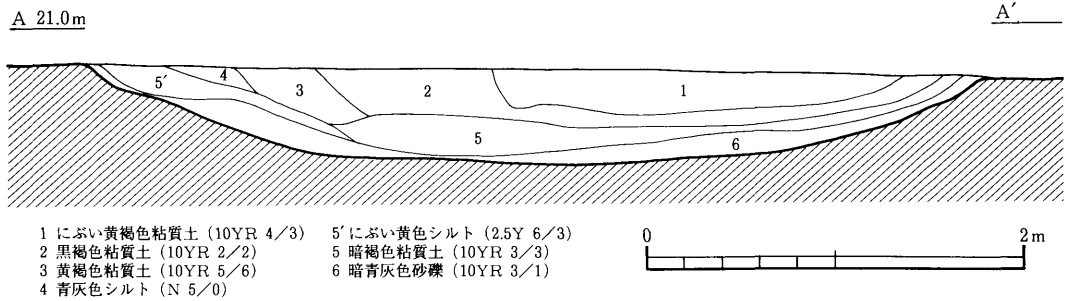


Fig. 26 近世土壌土層断面図

近世土壌出土遺物 (Fig.27-88~92, PL.22)

88は水甕である。底部は平底。口縁部及び頸部の立ち上がりを欠くが、頸部のしまりはなく、広口を呈すると推定される。外面・胴の張った部分に7条の凹線と2条の凸帯がめぐる。凸帯2条は上3条、下4条の凹線の間貼付される。凸帯上には、左下がりの連続押圧が施される。突帯は一巡するのではなく、途切れていた可能性がある。内面に斜格子のあて具痕がある。

89はすり鉢である。削り出し高台である。11本を一単位とする原体幅2.1cmの櫛が反時計回りにスリ目を施しているが、使用による摩耗が激しい。

90は徳利か。底面の縁が、高台状に1段高く突出する。釉調は白色で細い貫入がある。また、部分的に鉄釉を流し掛している。

91は萩焼き開口碗である。高台は鋭く削り込まれ、腰部は角張る。胴部が直線的に口縁部に向かって立ち上がる。釉は黄灰釉である。

92は伊万里系紅皿である。高台から胴部が弯曲して立ち上がる。口縁上端に面をもつ。体部外面に菊花文を施文している。釉は内面と外面高台付近まで施される。

近世土壌は91の萩焼き開口碗¹⁰⁾の特徴から、幕末以降も機能していたことが想定される。しかし、あまり時期が下降する遺物はなく、大学統合移転時には既に埋没していたと考えられる。

旧水田床土、耕作土出土土器 (Fig.27-93・94, PL.22)

大学統合移転以前に、営まれていた水田の床土及び耕作土中から、わずか2片ではあるが奈良～平安時代の須恵器が出土している。この付近では同時期の須恵器が表採されており、流れ込んだものであろう。

93は坏。高台内端面が接地する。高台はかなり高い。94は坏。高台端部を欠く。

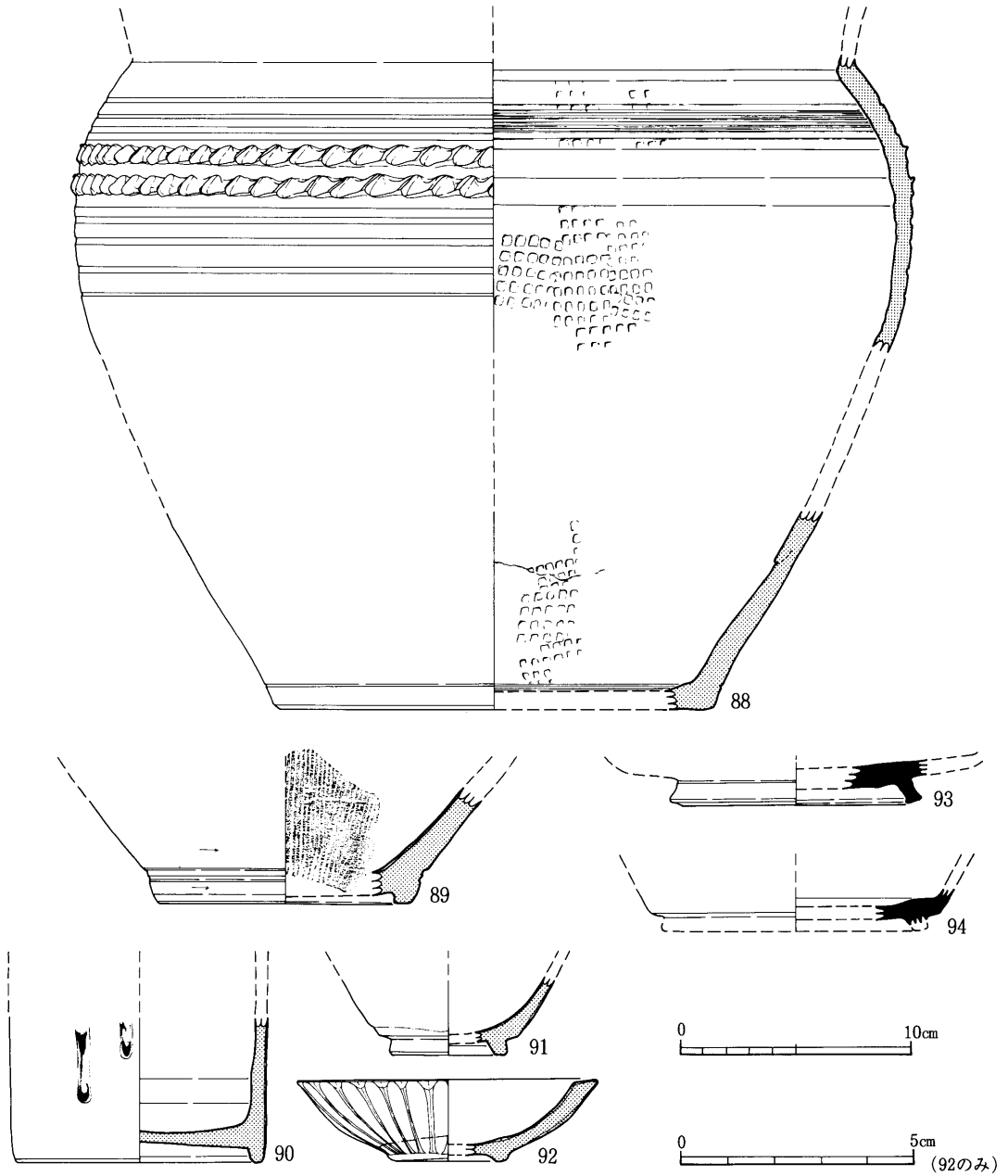


Fig. 27 近世土壙及び包含層出土土器実測図

6 小結

調査の結果、縄文時代河川跡、近世水田遺構が検出された。

縄文時代の河川跡は、試掘調査と同様に東岸を検出することはできなかったが、西南に蛇行していることと、西岸が水流によって抉り取られ、岬状の突出部を呈することが明らかとなった。河川跡の規模は、幅17m以上、25m以下で、深さは検出面から0.4～1 mを測る。河川跡の流路として、本調査地から北東の谷あいには源があることは年報XIで想定した。さらに今回の調査で、河川が西南に蛇行することから、昭和62年度に調査された教養部複合棟新営¹⁰⁾で検出されている縄文河川跡と同一のものである可能性が高まった。吉田構内北東の谷あいには端を発した河川は、地形的に最も低いと考えられる現在の構内中央に向かって流れ込んでいたのであろう。ただし、その流路は度々位置を変え、一定していなかったと考えられる。今後も周辺の調査を行い、流路に関するデータを蓄積していく必要がある。本調査区の河川跡において、岬状突出部を中心に水場としての利用が認めうるような土器の出土状況があったように、流路に関するデータの蓄積は自然環境の復元と、それをめぐる人の活動状況を明らかにする一助となろう。

近世水田遺構は、暗渠と溜池状の土壌を検出した。暗渠は東西と南北に走ることが認められた。暗渠は陶製の土管を用いており、大学統合移転直前まで使用されていたものと推定される。土壌は上層に粘土と植物の堆積があり、滞水状態にあったことがうかがえた。

出土遺物には旧石器時代のナイフ形石器・尖頭器、縄文時代の土器・石鏃・石匙などがある。いずれも河川跡からの出土である。このうち、旧石器及び縄文時代晩期以前の土器は、上流の洪積台地より流されてきたと考えられる。原位置をとどめるものではないが、ナイフ形石器と尖頭器の出土は特筆される。吉田遺跡におけるナイフ形石器の出土は、遺跡保存地区¹²⁾に続いて2例目である。

縄文時代晩期の土器は、やや型式幅をもつ。本報告では深鉢形土器の口縁形態より、A・B・Cの3類に分類した。本報告A類は岩田第三類aに、B類は岩田第四類cに、C類は岩田第四類cの新しい部分に相当する。浅鉢形土器は小片のため、型式を判定するまでには至らなかった。この他、夜臼系壺形土器とおぼしき破片が出土しているが、間違いがなければ河川跡の最も新しい出土遺物である。河川跡出土の晩期土器のなかでは深鉢形土器A類が古く前半に位置づけられ、最も新しい夜臼系壺形土器は末に位置づけられる。このうち主体を占めるのは、深鉢形土器C類である。深鉢形土器C類は岩田遺跡の報告において「第四類土器と第五類土器の間を埋めるものの可能性も強く、新しい要素を具えた甕形

土器と考えられる。」として、凸帯文土器の直前に位置づけられている。その見解は正しく、山口県内縄文晩期土器編年における岩田第四類と奥正権寺¹³⁾の間に位置する未命名の一型式である。連合獣医の調査では深鉢形土器C類のみで浅鉢を欠くが、山口市木崎遺跡¹⁴⁾の浅鉢が加わることによって、この未命名の型式が構成されと考えればよい。今後の資料の充実によって、岡山県原下層式¹⁵⁾や北九州市貫川Ⅲ b式¹⁶⁾との比較が可能になるだろう。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う試掘調査」
(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XI、1993年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XI、1993年)
- 3) 山口県教育委員会『屋敷遺跡』(1990年)
- 4) 鞍手町埋蔵文化財調査会『新延貝塚』(1980年)。泉拓良氏のご教示による。
- 5) 米子市教育委員会『陰田』(1984年)。泉拓良氏のご教示による。
- 6) 泉拓良氏のご教示による。
- 7) 潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」(『広島大学文学部紀要』第18号、1960年)
- 8) 榑松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター「道後今市遺跡8次調査」(『道後城北遺跡群』、1992年)
- 9) 香川県教育委員会『林・坊城遺跡』(1993年)
- 10) 山口県教育委員会『萩焼古窯』(1990年)
- 11) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」
(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅶ、1988年)
- 12) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅵ、1987年)
- 13) 山口県教育委員会『奥正権寺遺跡』I (1984年)
- 14) 山口県教育委員会『朝田墳墓群I 付 木崎遺跡』(1976年)
- 15) 鎌木義昌・高橋護「瀬戸内」(『日本の考古学』2、1965年)
- 16) 前田義人『貫川遺跡』2 (『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第85集、1989年)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査

Tab. 2 出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	出土地点	備考
縄文河川跡 縄文土器 (Fig.11・13~20)						
4	縄文土器		①暗褐色 ②灰褐色	黒雲母の微砂粒を含む	D 3 区	2条の隆帯が残存
5	縄文土器		黒褐色	2~3mmの砂粒を含む	A 4 区	外面に2段以上の刺突文
6	縄文土器		①暗褐色 ②褐灰色	1mm弱の砂粒を含む	E 4 区	外面にLRの縄文 内面に貝殻条痕
7	縄文土器		①赤褐色 ②褐灰色	赤色斑粒を含む	E 4 区	外面の弧状の隆帯2条
8	縄文土器	深鉢 ①(40.0)	①褐灰色 ②黒灰色	2~3mmの石英角礫を含む	B 3 区	口縁部は波状をなすと思われる
9	縄文土器	深鉢 ①(39.0)	①褐灰色 ②黒灰色	2~3mmの石英角礫を含む	D 2 区 試掘調査出土	内面の条痕は巻貝によるものか
10	縄文土器	深鉢 ①(47.4)	①暗褐色 ②黒褐色	2~3mmの石英角礫、 小石を含む	D 1 区	口縁部端面に長楕円の押圧
11	縄文土器	深鉢	褐灰色	微砂粒を多量に含む	H 1 区	浅鉢の可能性はある
12	縄文土器	深鉢	①褐色 ②灰黒色	1~2mmの砂粒を含む	A 1 区 試掘調査出土	
13	縄文土器	深鉢	①乳白色 ②黒色	1~2mmの砂粒を含む	C 3 区	外面の風化が著しい
14	縄文土器	深鉢	①褐色 ②黒灰色	1mm弱の砂粒を含む	A 4 区	外面の風化は著しいが内面は条痕を残す
15	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②黒灰色	1mm前後の砂粒を含む	C 1 区	外面に条痕 20と同一個体か
16	縄文土器	深鉢	①暗褐色 ②黒色	1mm前後の砂粒を含む	B 1 区	口縁端面に凹線
17	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②黒色	微砂粒を含む	B 3 区	
18	縄文土器	深鉢	褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	B 2 区	
19	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②灰黒色	1mm前後の砂粒を含む	D 1 区 試掘調査出土	外面にヘラ描き文
20	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②黒灰色	1mm前後の砂粒を含む	D 1 区 試掘調査出土	15と同一個体か
21	縄文土器	深鉢	暗赤褐色	微砂粒を含む	D 2 区 試掘調査出土	
22	縄文土器	深鉢	①暗褐色 ②褐灰色	黒雲母を含む	D 3 区 試掘調査出土	外面にナデ 内面に条痕
23	縄文土器	深鉢	①暗褐色 ②灰色	微砂粒及び、3~4mm の石英角礫を含む	表探 試掘調査出土	外面に条痕
24	縄文土器	深鉢	褐灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	B 2 区	外面に条痕
25	縄文土器	深鉢	褐灰色	1~2mm前後の砂粒を含む	C 1 区	外面に煤付着
26	縄文土器	深鉢	灰褐色	2~3mmの石英角礫を含む	C 1 区	
27	縄文土器	深鉢	①褐色 ②黒灰色	1mm前後の砂粒及び2 ~3mmの角礫を含む	D 1 区	外面に条痕
28	縄文土器	深鉢	①褐灰色 ②黒色	2~3mmの砂粒を含む	D 1 区 試掘調査出土	外面に条痕
29	縄文土器	深鉢	①暗褐色 ②黒色	微砂粒を含む	B 1 区	内外面にミガキ 浅鉢の可能性あり
30	縄文土器	深鉢	①褐灰色 ②灰色	微砂粒を多く含む	C 1 区	外面条痕後ナデ
31	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②黒色	2mm前後の砂粒を含む	A 4 区	32と同一個体か
32	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②黒色	2mm前後の砂粒を含む	A 4 区	外面条痕後、板ナデ
33	縄文土器	深鉢	①褐灰色 ②黒灰色	2~3mmの石英角礫を含む	B 3 区	8と同一個体か
34	縄文土器	深鉢	①褐灰色 ②黒灰色	1~3mmの石英角礫を含む	D 4 区	8と同一個体か
35	縄文土器	深鉢	①褐灰色 ②黒灰色	1~3mmの石英角礫を含む	B 2 区	8と同一個体か
36	縄文土器	深鉢	①淡褐灰色 ②灰黒色	1~2mmの砂粒を多く含む	G 1 区	
37	縄文土器	深鉢	①褐灰色 ②灰黒色	1~2mmの砂粒を多く含む	C 1 区	
38	縄文土器	深鉢	①淡褐灰色 ②灰黒色	1mmの砂粒及び3~4 mmの石英角礫を含む	A 4 区	
39	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②褐灰色	2~3mmの石英角礫を含む	I 3 区	
40	縄文土器	深鉢	①黒褐色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	D 2 区	禾本科植物の茎による条痕か
41	縄文土器	深鉢	淡褐灰色	微砂粒を多く含む	C 1 区	
42	縄文土器	深鉢	①黒褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	D 1 区 試掘調査出土	禾本科植物の茎による条痕か

出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	出土地点	備考
43	縄文土器 深鉢		淡褐色	2~3mmの石英角礫を含む	B1区	
44	縄文土器 深鉢		①淡赤褐色 ②黒色	2mm前後の砂粒を含む	J1区	
45	縄文土器 深鉢		①淡褐色 ②黒色		J1区	外面ケズリ状の条痕 内面に条痕
46	縄文土器 深鉢		①褐色 ②暗褐色	1~3mm前後の砂粒を含む	B1区	外面ケズリ後ナデ
47	縄文土器 深鉢		暗褐色	微砂粒を多量に含む	B2区	禾本科植物の茎による条痕か
48	縄文土器 深鉢		①灰褐色 ②灰黒色	微砂粒及び、3mm前後の砂粒を含む	D1区 試掘調査出土	外面ケズリ状の条痕
49	縄文土器 深鉢		①白色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	D1区 試掘調査出土	50と同一個体か
50	縄文土器 深鉢		①白色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	C1区	49と同一個体か
51	縄文土器 深鉢		①褐色 ②黒灰色	1mm前後の砂粒を含む	G1区	
52	縄文土器 浅鉢	①(32.8)	①明褐色 ②黒色	微砂粒を多量に含む	試掘調査出土	口縁部内面に沈線
53	縄文土器 浅鉢		淡灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	D1区 試掘調査出土	
54	縄文土器 浅鉢		①灰褐色 ②褐色	2~3mmの石英角礫を含む	B2区	
55	縄文土器 浅鉢		①黒褐色 ②淡褐色	2~3mmの石英角礫を含む	試掘調査出土	
56	縄文土器 浅鉢		①褐色 ②黒灰色	1~2mmの石英角礫を含む	B1区	
57	縄文土器 深鉢底部		①淡黄色 ②暗褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	D4区	
58	縄文土器 深鉢底部		①淡黄灰色 ②暗灰色	1~3mmの砂粒を多量に含む	J1区	
59	縄文土器 深鉢底部		①乳白色 ②黒灰色	2~4mmの石英角礫を含む	D2区 試掘調査出土	高台上に粘土紐を貼付ける
60	縄文土器 深鉢底部		①赤褐色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	A3区	
61	縄文土器 壺		淡褐色	1~3mmの石英角礫を含む	A1区	頸胴部に段 (沈線を加工)
近世土壌 (Fig.27)						
88	陶器 甕	②(19.0)	素地 灰黒色 釉調 暗褐色	精製粘土		肥前系か
89	陶器 すり鉢	②(10.8)	①暗赤褐色 ②赤褐色	1~2mmの長石を含む		内面は使用による磨減が激しい
90	磁器 徳利	②(10.4)	素地 黄灰色 釉調 灰白色	精製粘土		
91	磁器 碗	②(4.8)	素地 灰白色 釉調 灰白色	精製粘土		外面の釉は腰部まで
92	磁器 紅皿	①(4.4)②(1.7)③(1.15)	素地 白色 釉調 灰白色	精製粘土		外面の高台に釉はかからない
旧水田床土・耕作土 (Fig.27)						
93	須恵器 坏	②(10.8)	青灰色	精製粘土		
94	須恵器 坏		青灰色	長石を含む		

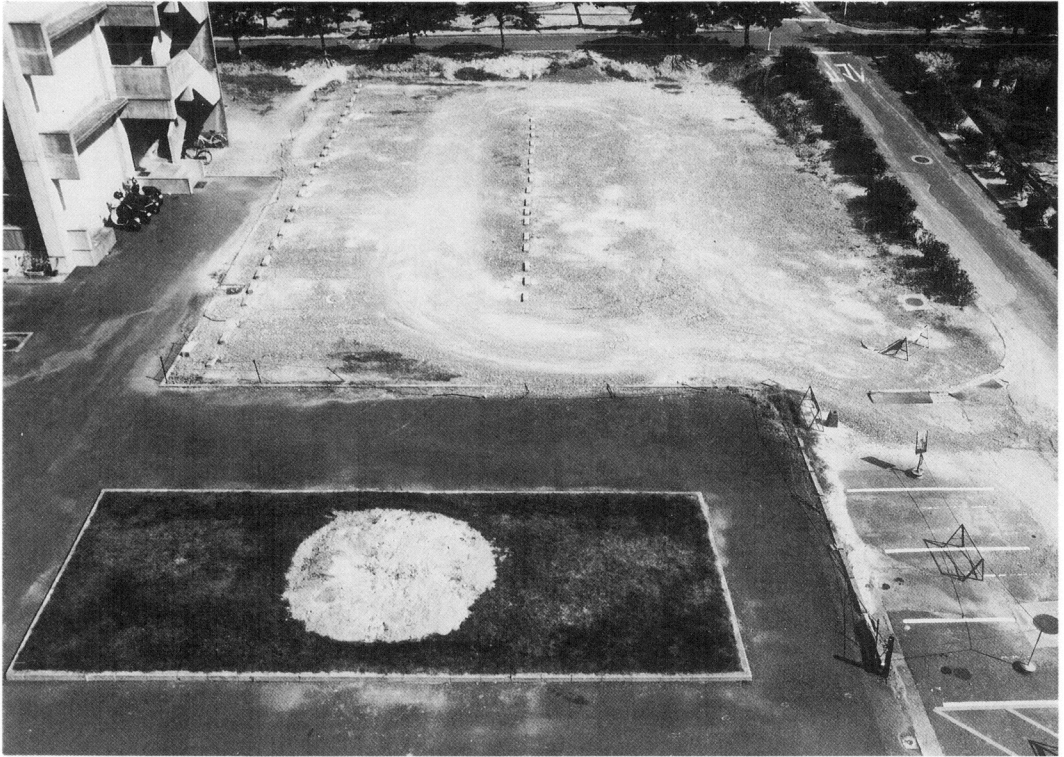
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
縄文河川跡 旧石器 (Fig.10)								
1	ナイフ形石器	4.0	1.9	0.9	4.04	黒曜石	B3区	全体的に磨減が激しい
2	ポイント	6.85	2.5	1.25	21.22	サヌカイト	D3区	全体的に磨減が激しい
3	石核	4.5	3.3	1.85	24.04	チャート	E2区	
縄文河川跡 石器 (Fig.22~24)								
62	石匙	4.9	(6.6)	1.05	26.34	サヌカイト	C2区	刃部両面調整
63	石鏃	1.9	1.8	0.3	0.90	メノウ	D1区 試掘調査出土	
64	剥片	2.4	1.2	0.55	1.66	水晶	C3区	
65	剥片	2.7	2.9	0.8	6.11	水晶	H2区	
66	剥片	1.5	2.1	0.25	0.80	サヌカイト	H2区	

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査

法量()は復元値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
67	剥片	2.15	1.9	0.45	1.47	サヌカイト	B 2 区	
68	剥片	3.2	3.7	0.5	5.49	流紋岩	E 4 区	
69	剥片	4.1	1.7	0.9	6.85	流紋岩	排土出土	
70	剥片	3.5	2.15	0.75	5.80	頁岩	A 4 区	
71	剥片	3.0	2.4	0.9	8.02	黒曜石	A 1 区	
72	剥片	2.3	1.75	0.25	0.91	黒曜石	E 3 区	
73	剥片	1.6	2.4	0.4	1.38	黒曜石	E 4 区	
74	剥片	1.9	1.6	0.3	0.55	黒曜石	J 2 区	
75	剥片	4.6	7.1	1.15	33.98	姫島産黒曜石	D 4 区	
76	剥片	4.1	4.2	1.5	23.05	姫島産黒曜石	D 4 区	
77	剥片	2.7	3.55	1.65	14.23	姫島産黒曜石	E 3 区	
78	剥片	3.2	1.65	0.8	2.97	姫島産黒曜石	B 4 区	
79	剥片	3.2	1.5	0.5	2.18	姫島産黒曜石	E 3 区	
80	剥片	3.75	1.9	1.15	4.31	姫島産黒曜石	E 3 区	
81	剥片	5.0	2.35	0.9	10.23	姫島産黒曜石	D 4 区	
82	剥片	3.2	2.05	0.55	5.51	姫島産黒曜石	E 4 区	
83	剥片	2.2	2.0	0.8	3.08	姫島産黒曜石	E 4 区	
84	剥片	2.4	1.7	0.35	1.36	姫島産黒曜石	J 1 区	
85	剥片	1.5	1.45	0.2	0.51	姫島産黒曜石	E 4 区	
86	剥片	2.0	1.8	0.5	1.69	姫島産黒曜石	E 3 区	
87	剥片	1.6	1.5	0.6	1.28	姫島産黒曜石	J 1 区	

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(1)



(1) 調査前全景（南から）



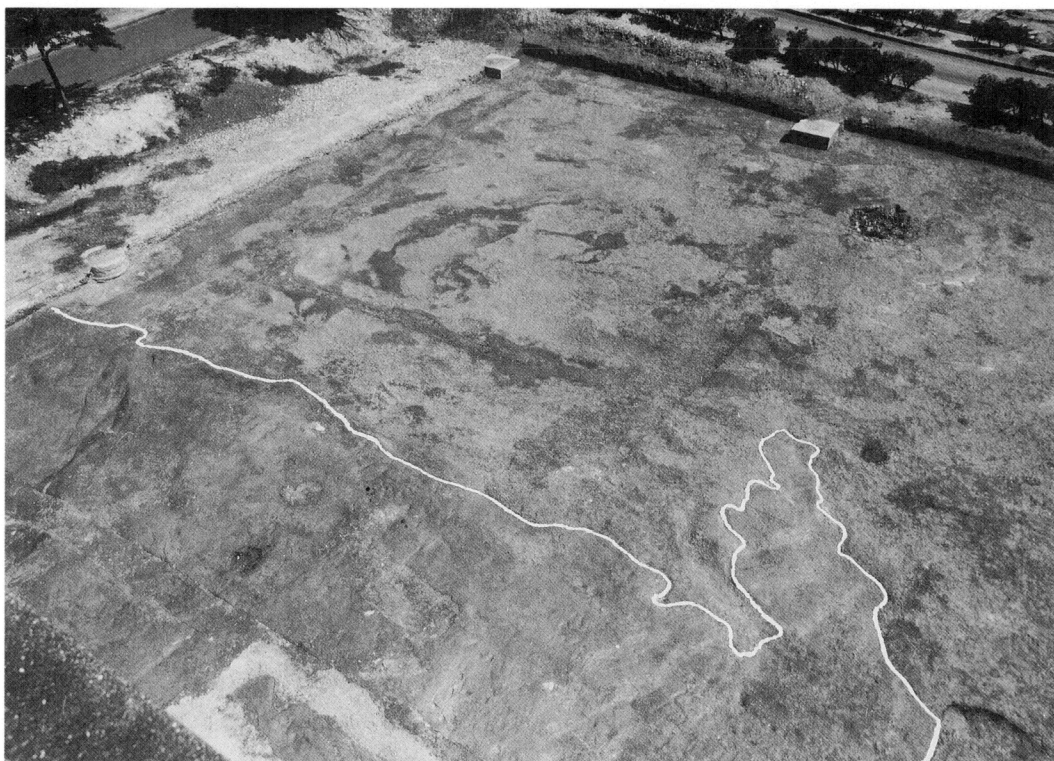
(2) 縄文時代河川跡検出状況（南から）

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査 (2)



縄文時代河川跡完掘状況 (南から)

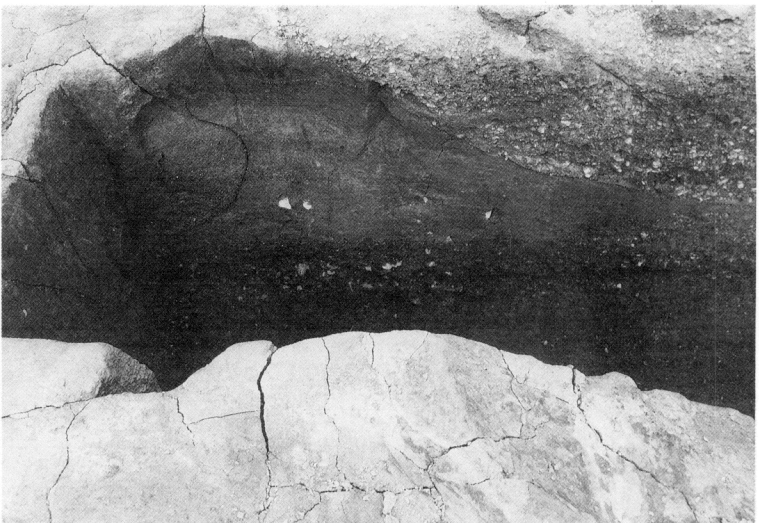
吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(3)



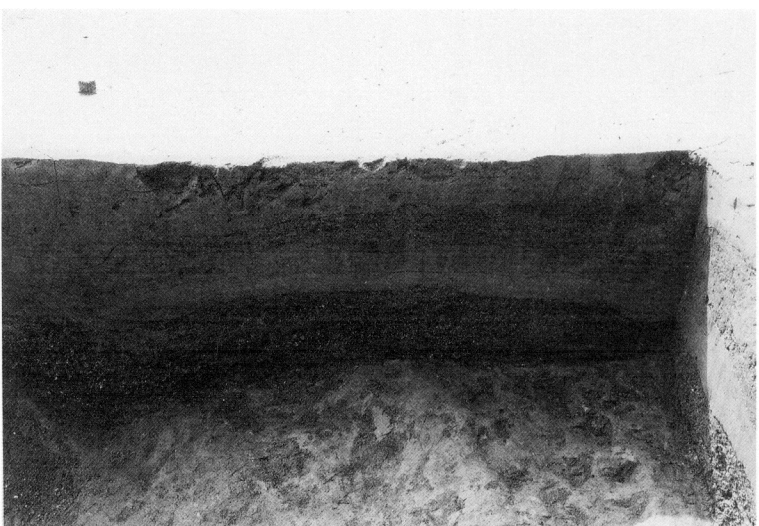
(1) 縄文時代河川跡検出状況（西から）



(2) 縄文時代河川跡完掘状況（西から）



(1) 縄文時代河川跡西肩・北壁土層断面(南から)



(2) 縄文時代河川跡西肩・
観察トレンチ2土層断面(北から)



(3) 縄文時代河川跡北壁断ち割り(西から)



(4) 縄文時代河川跡北壁断ち割り(東から)

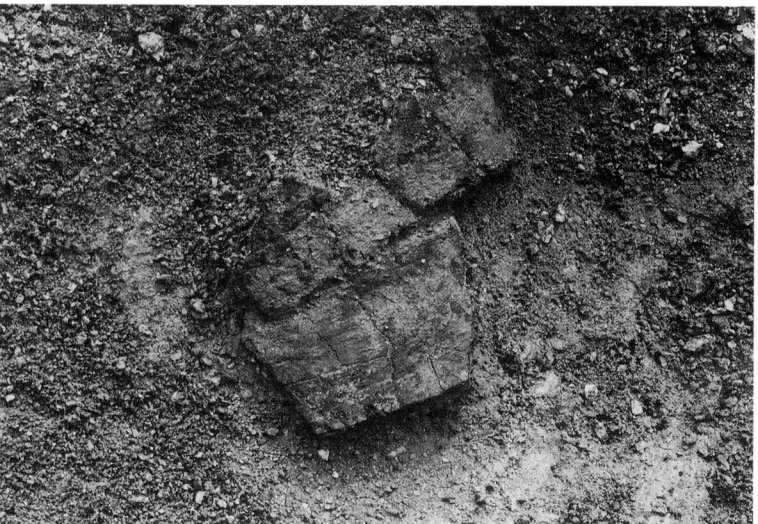
吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査 (5)



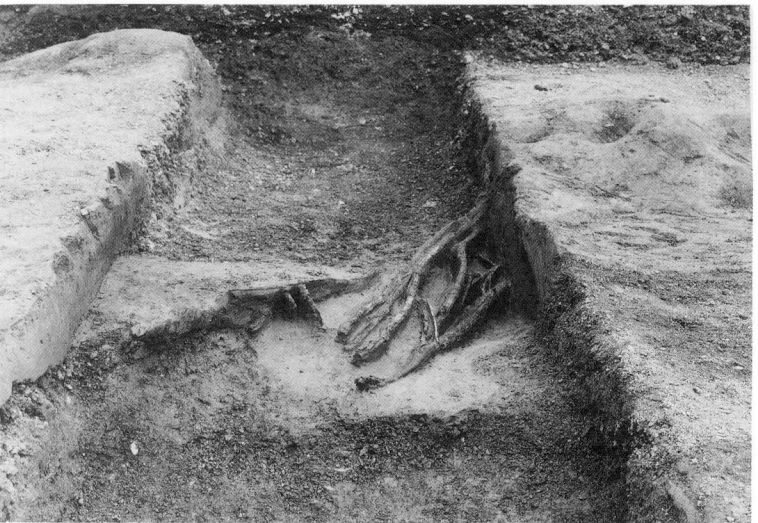
(1) 河川跡西壁及び縄文土器11出土状況



(2) 縄文土器11出土状況(近景)



(3) 縄文土器10出土状況



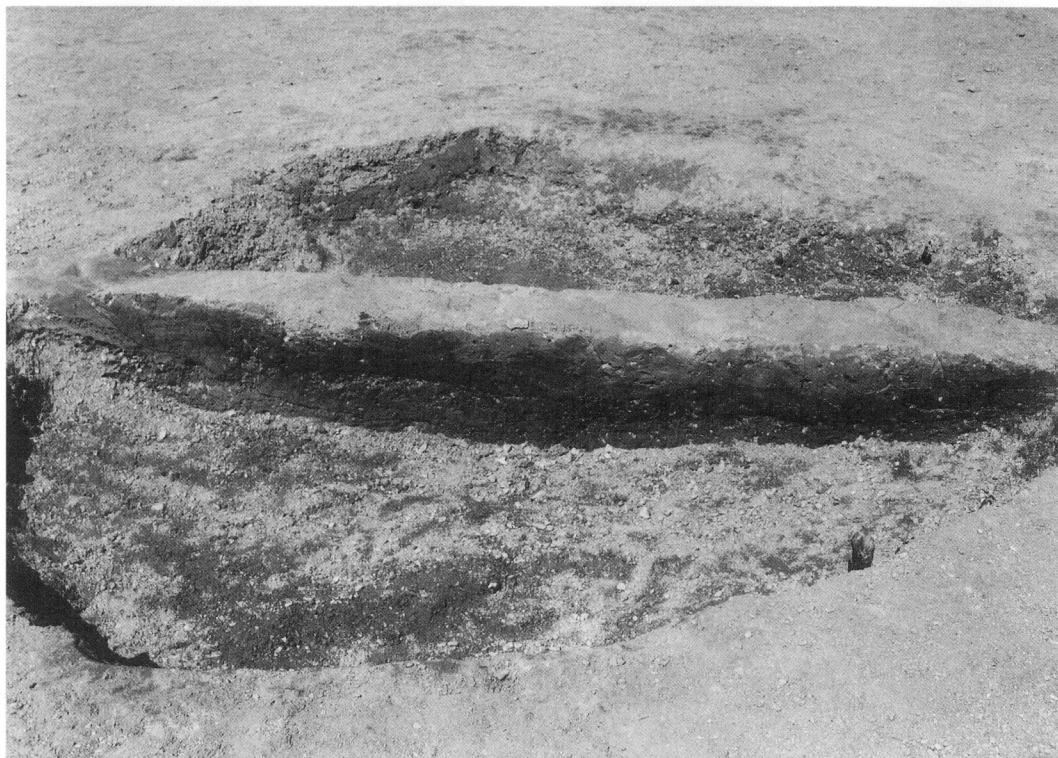
(4) 河川跡(縄文以前) 流木出土状況



(1) 1号暗渠 (南から)



(2) 2号暗渠 (西から)

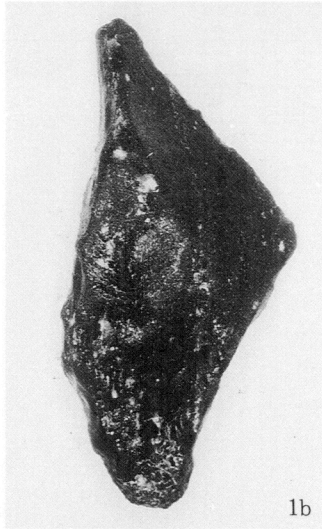


(3) 近世土壌 (南から)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(7)



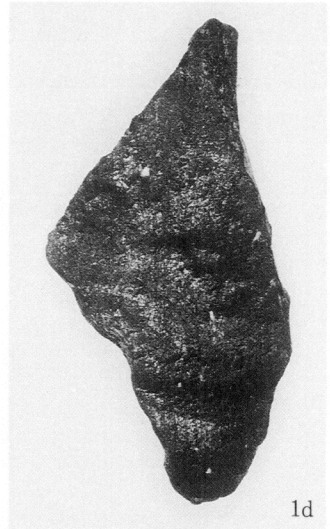
1a



1b



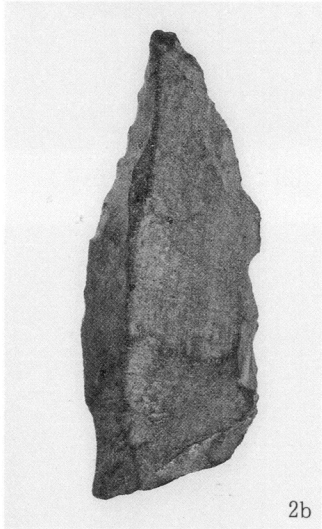
1c



1d



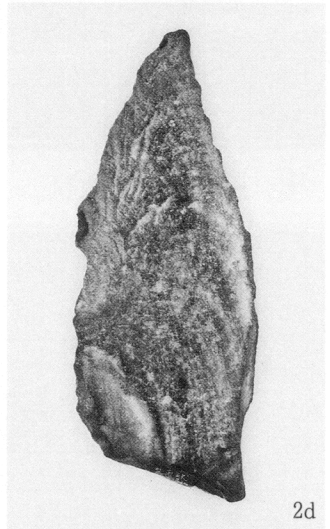
2a



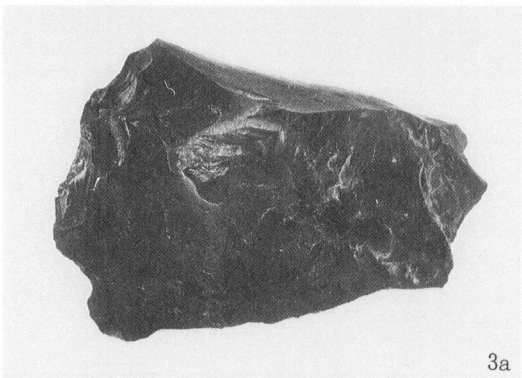
2b



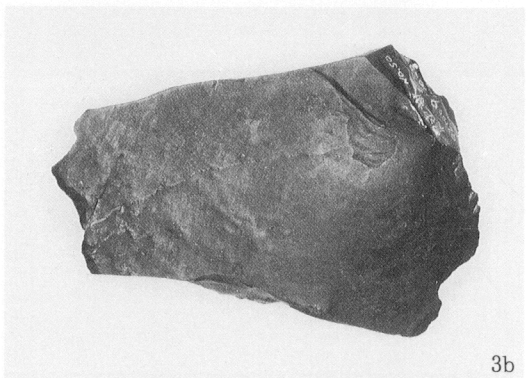
2c



2d

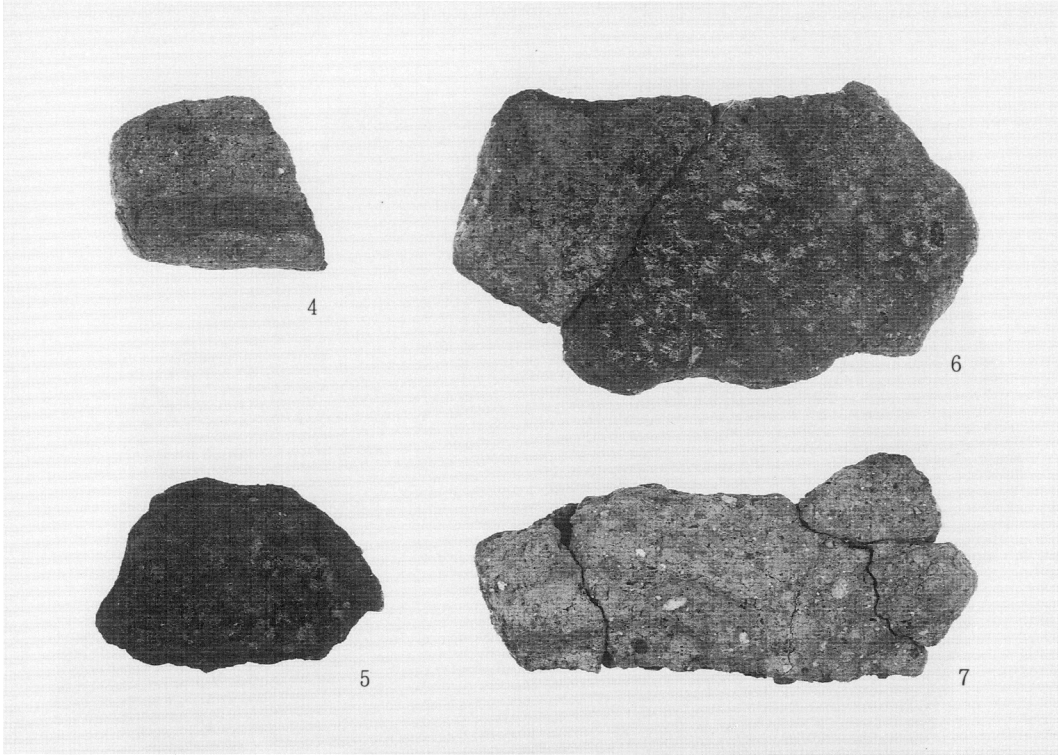


3a

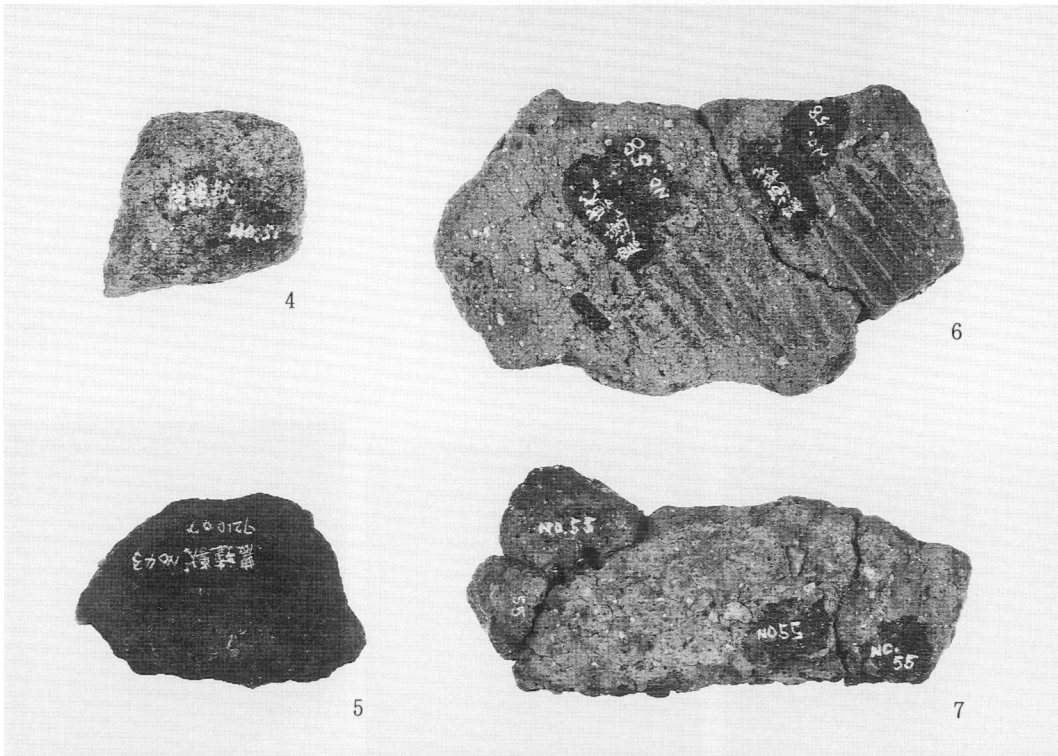


3b

縄文時代河川跡出土遺物(1) 旧石器



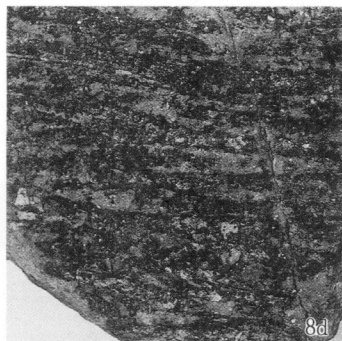
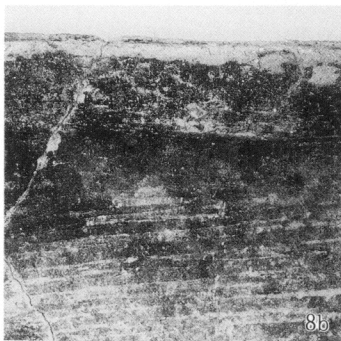
(表)



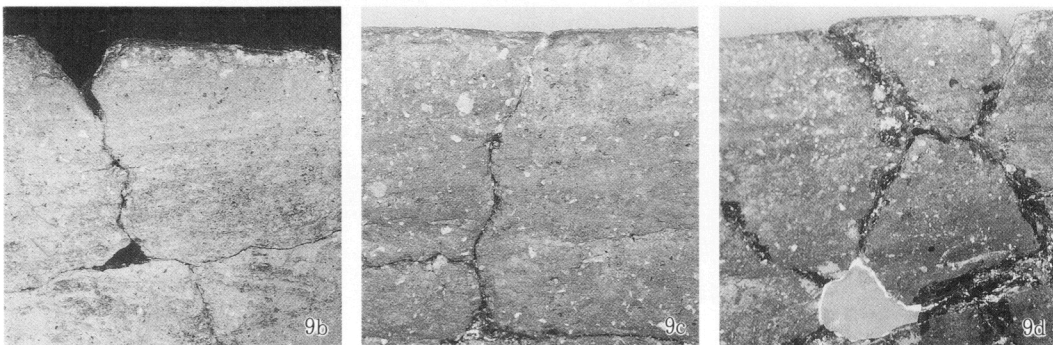
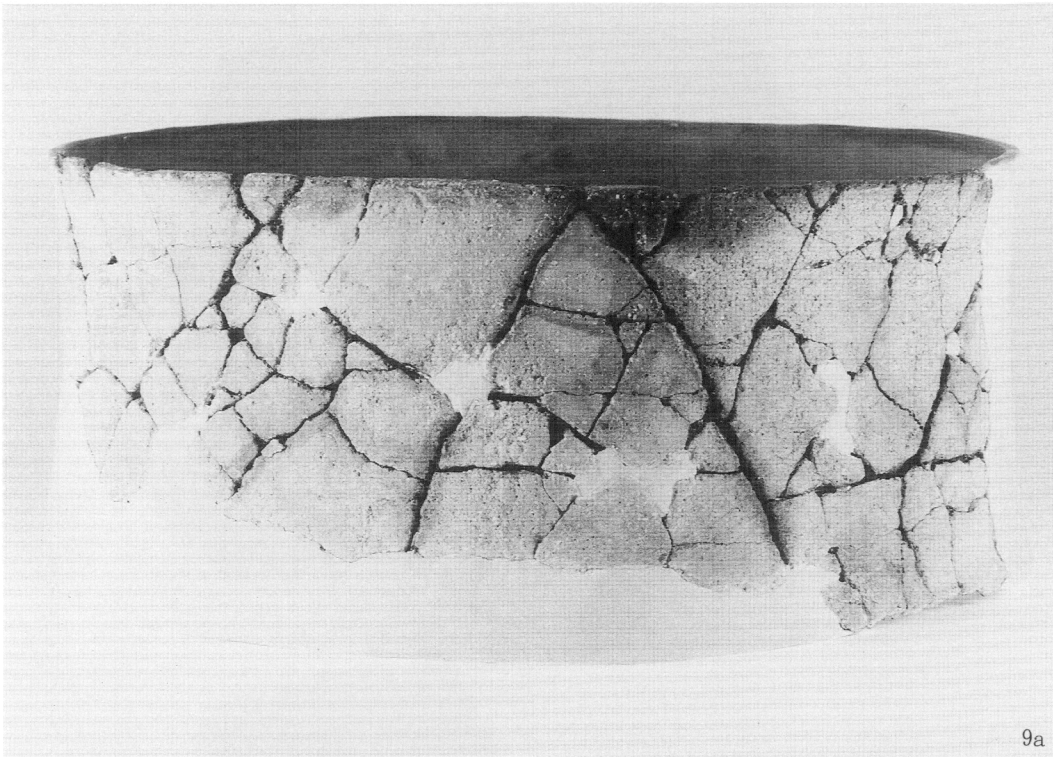
縄文時代河川跡出土遺物(2) 晩期以前土器

(裏)

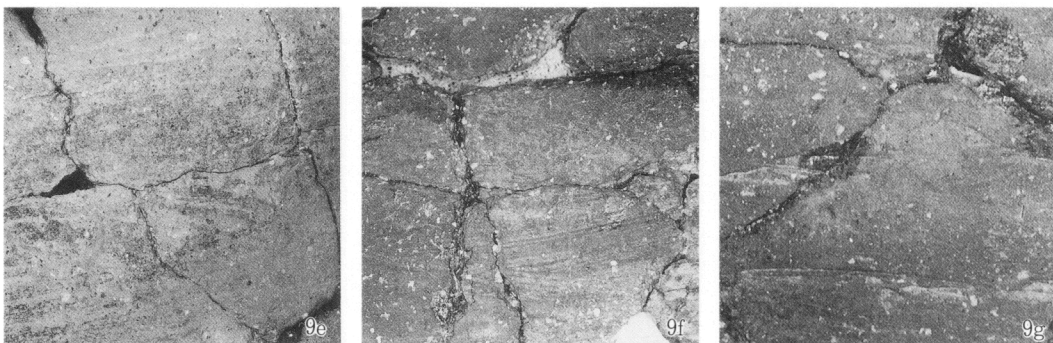
吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(9)



縄文時代河川跡出土遺物(3) 晩期土器深鉢B類 (b 口縁端部外面、c 口縁端部内面、d 胴部外面)

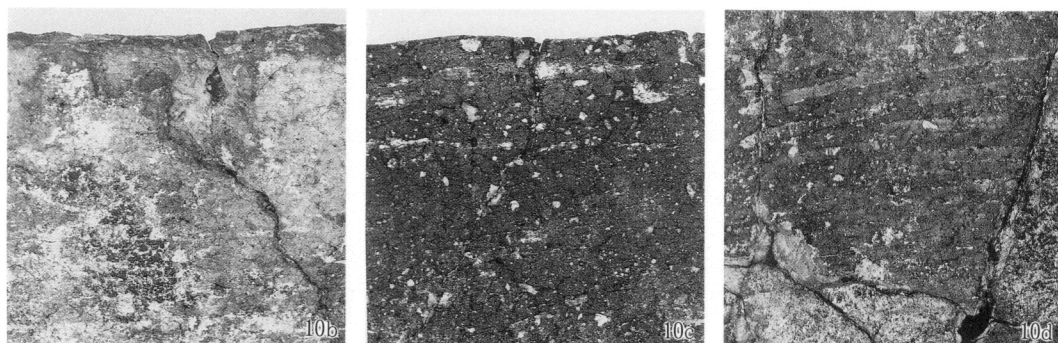
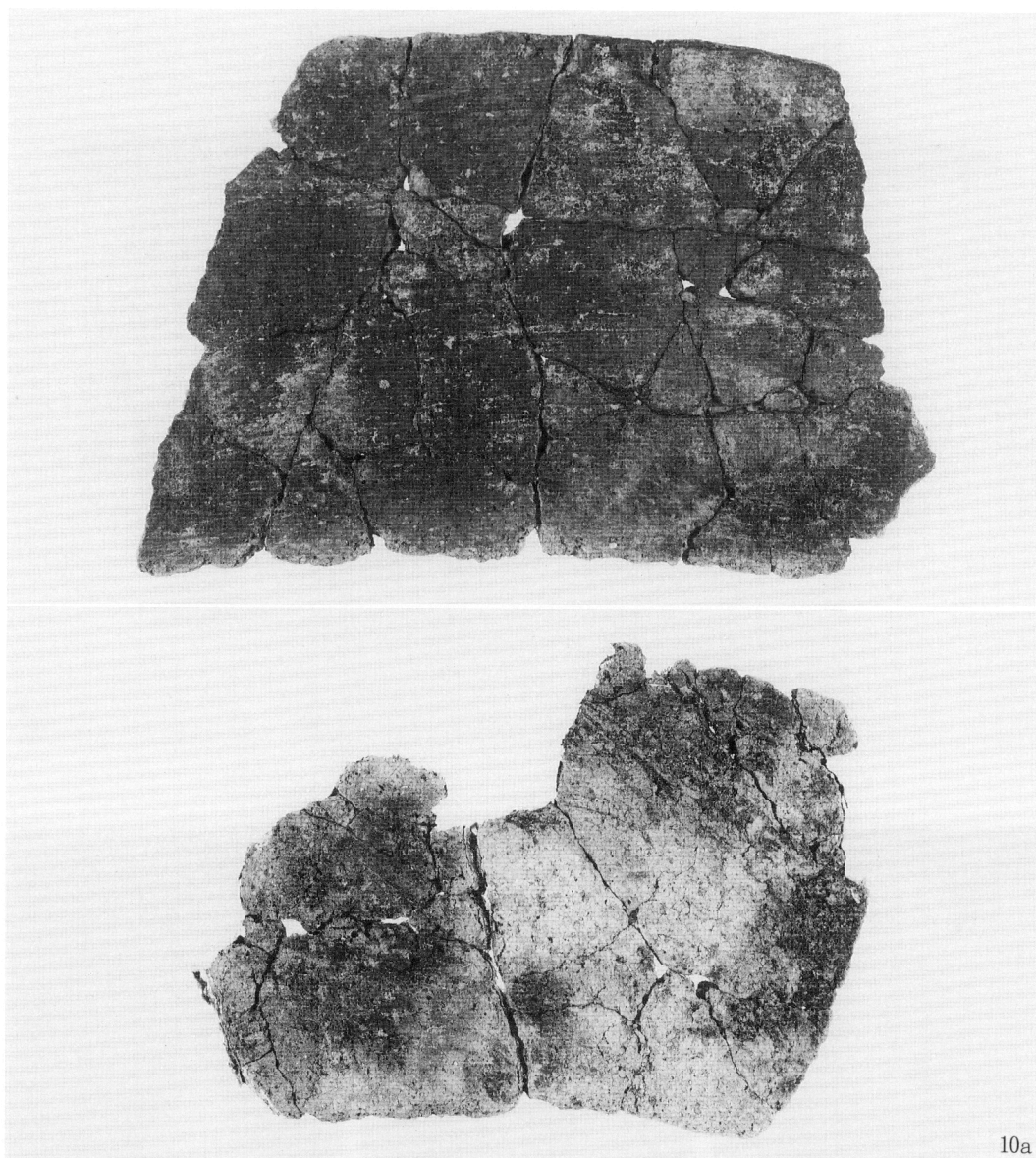


(b 口縁端部外面、c・d 口縁端部内面)



縄文時代河川跡出土遺物(4) 晩期土器深鉢C 1類 (e 胴部内面、f 胴部内面条痕、g 胴部内面)

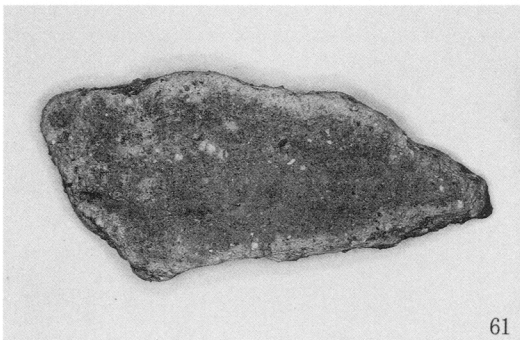
吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(11)



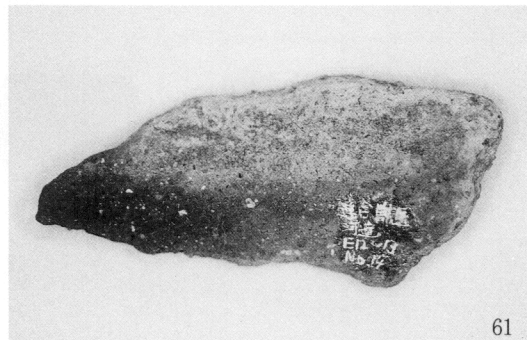
縄文時代河川跡出土遺物(5) 晩期土器深鉢C 2類 (b 口縁端部外面、c 口縁端部内面、e 胴部外面)



11



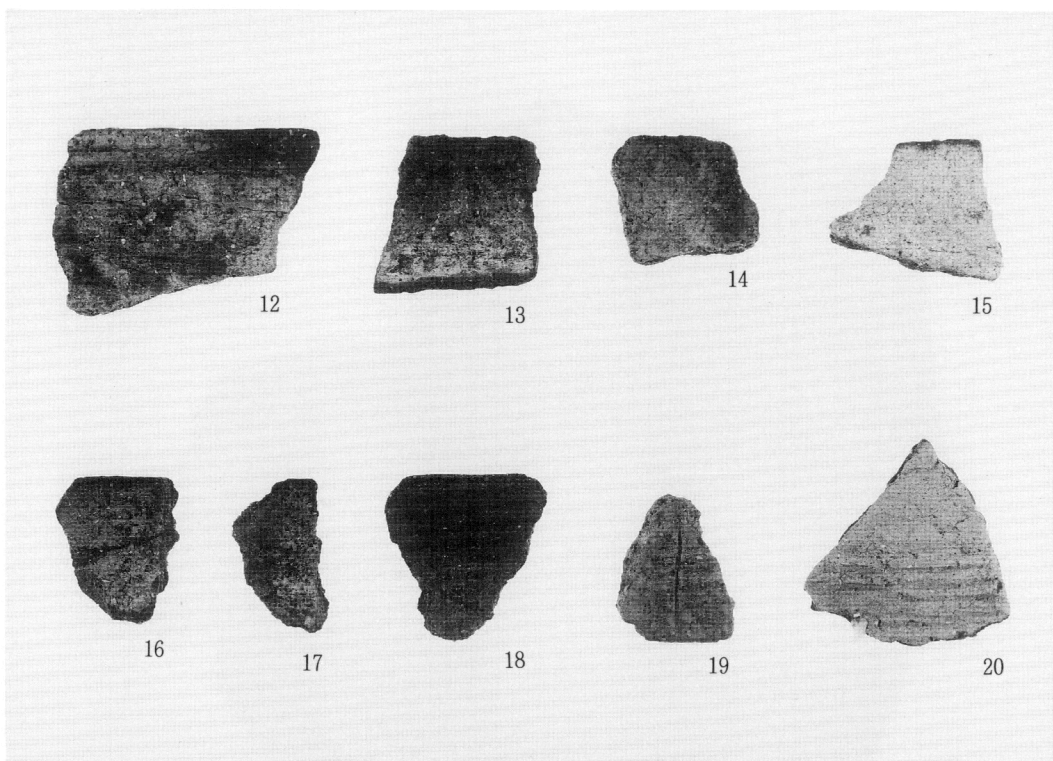
61



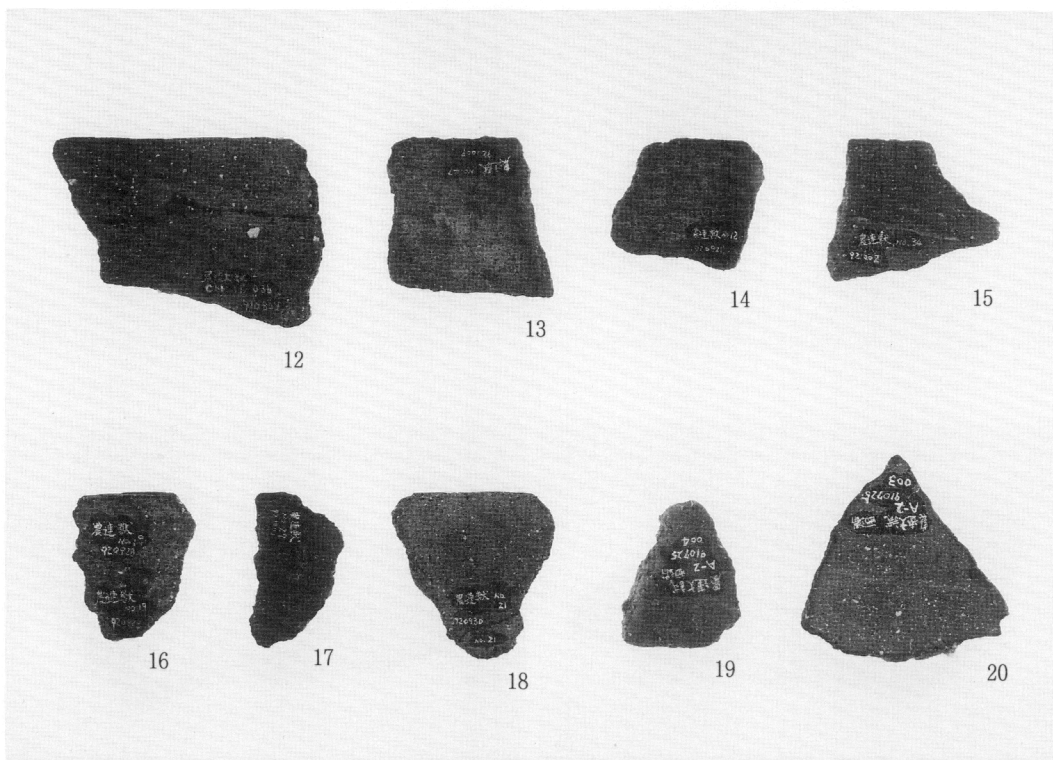
61

縄文時代河川跡出土遺物(6) 晩期土器深鉢D類・壺

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(13)

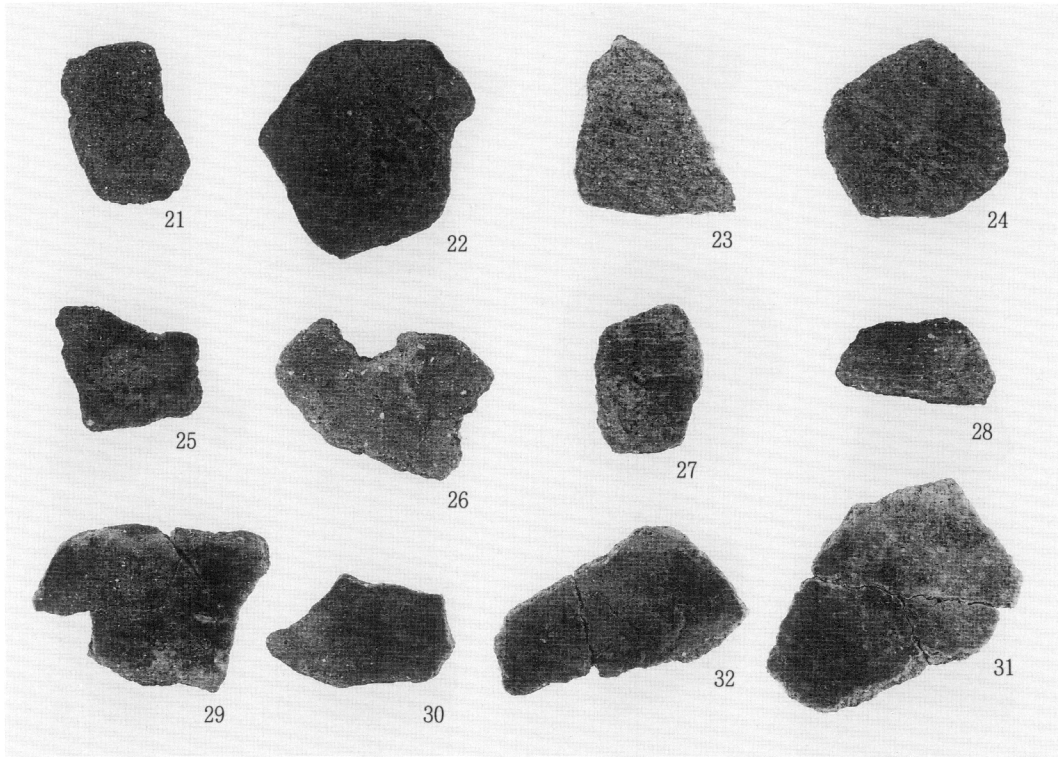


(表)

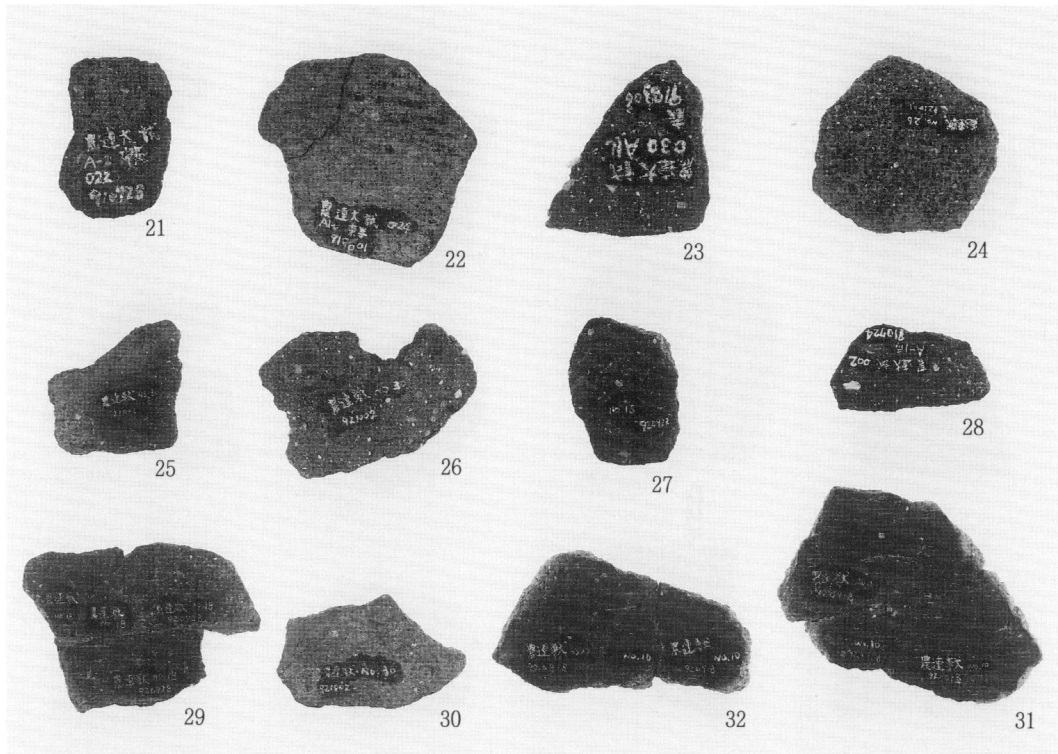


縄文時代河川跡出土遺物(7) 晩期土器深鉢口頸部

(裏)



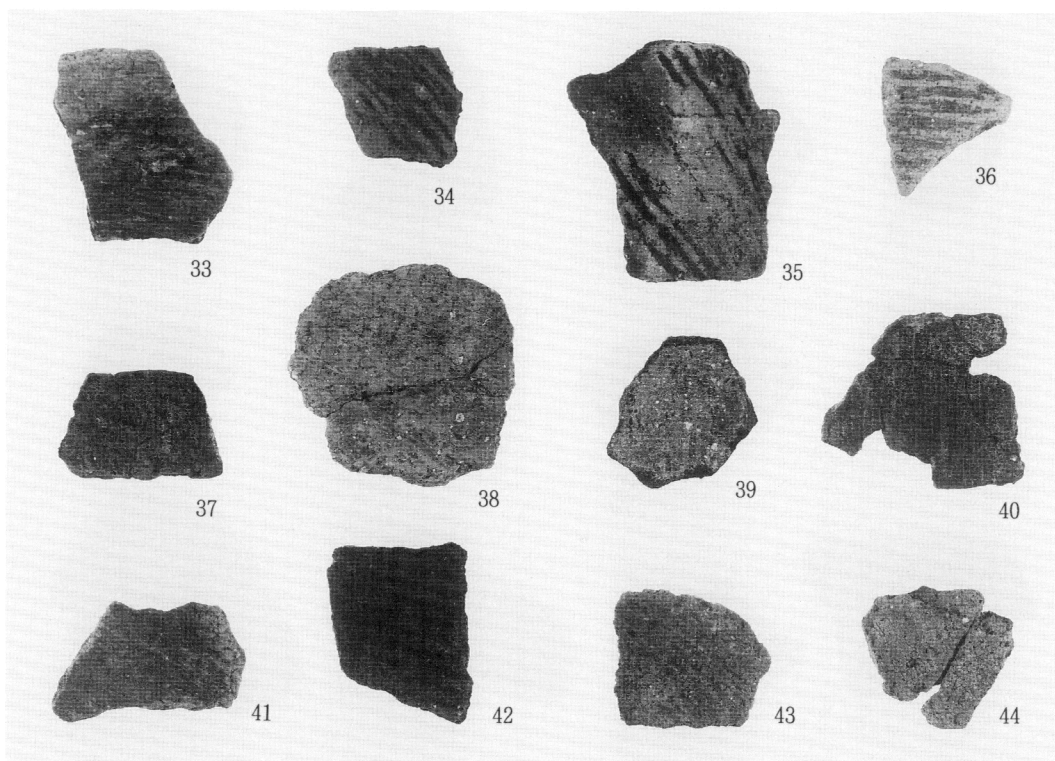
(表)



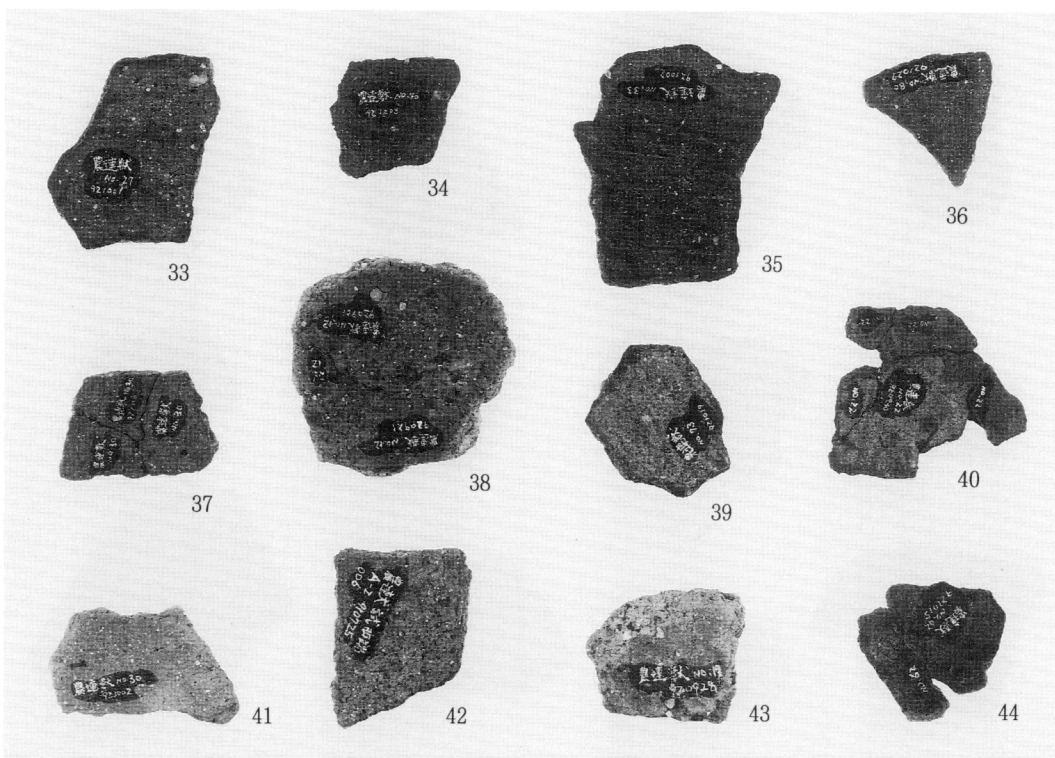
縄文時代河川跡出土遺物(8) 晩期土器深鉢頸部

(裏)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査 (15)



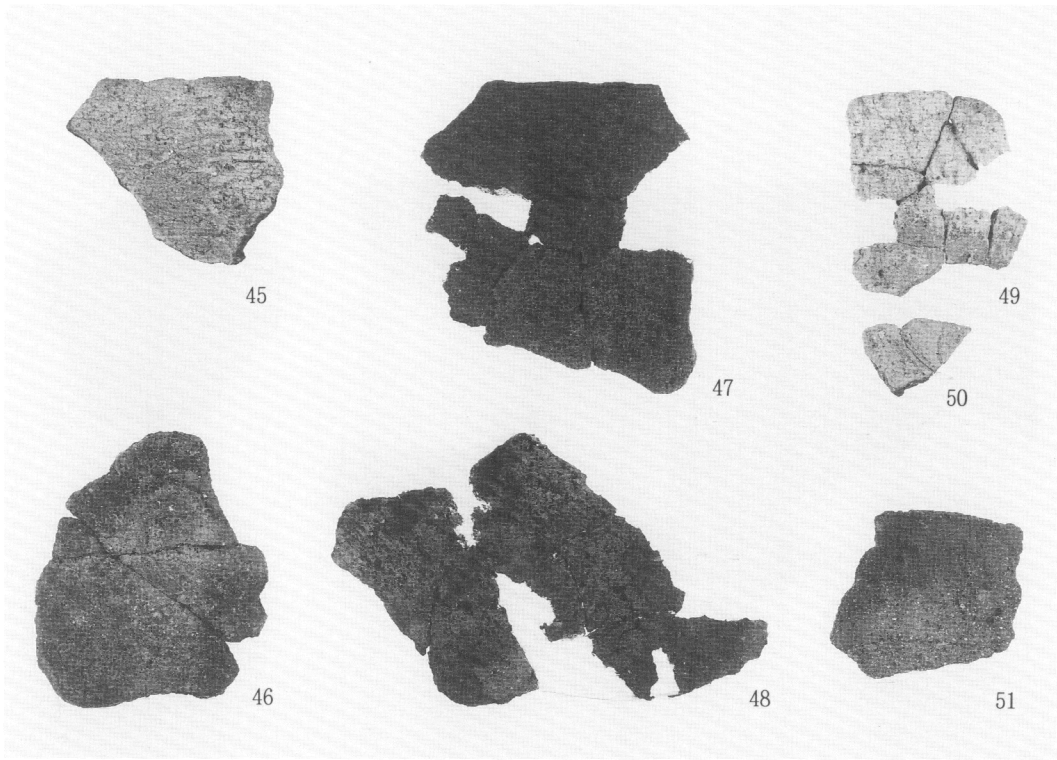
(表)



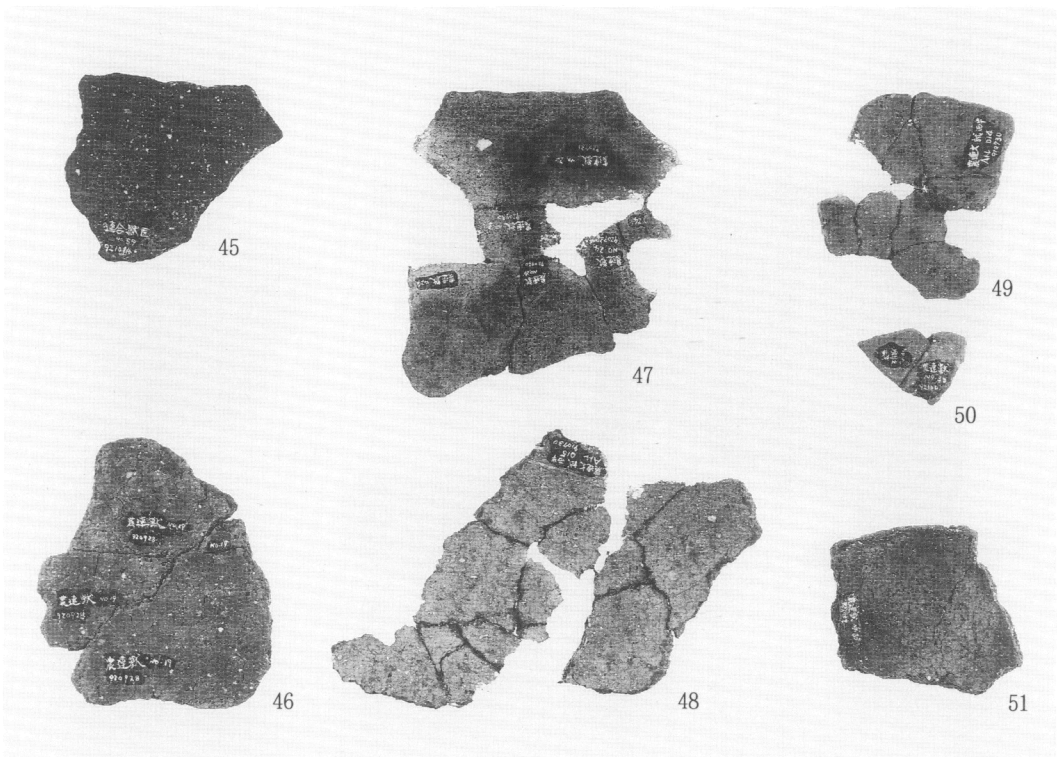
縄文時代河川跡出土遺物(9) 晩期土器深鉢胴部

(裏)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査 (16)



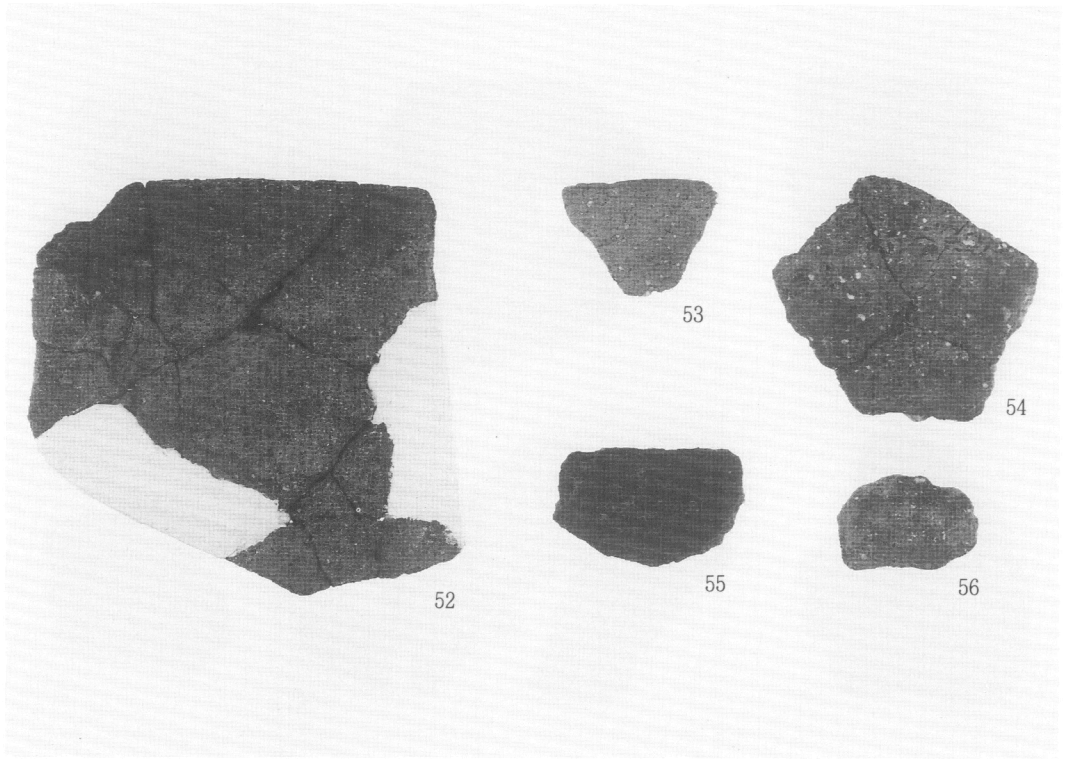
(表)



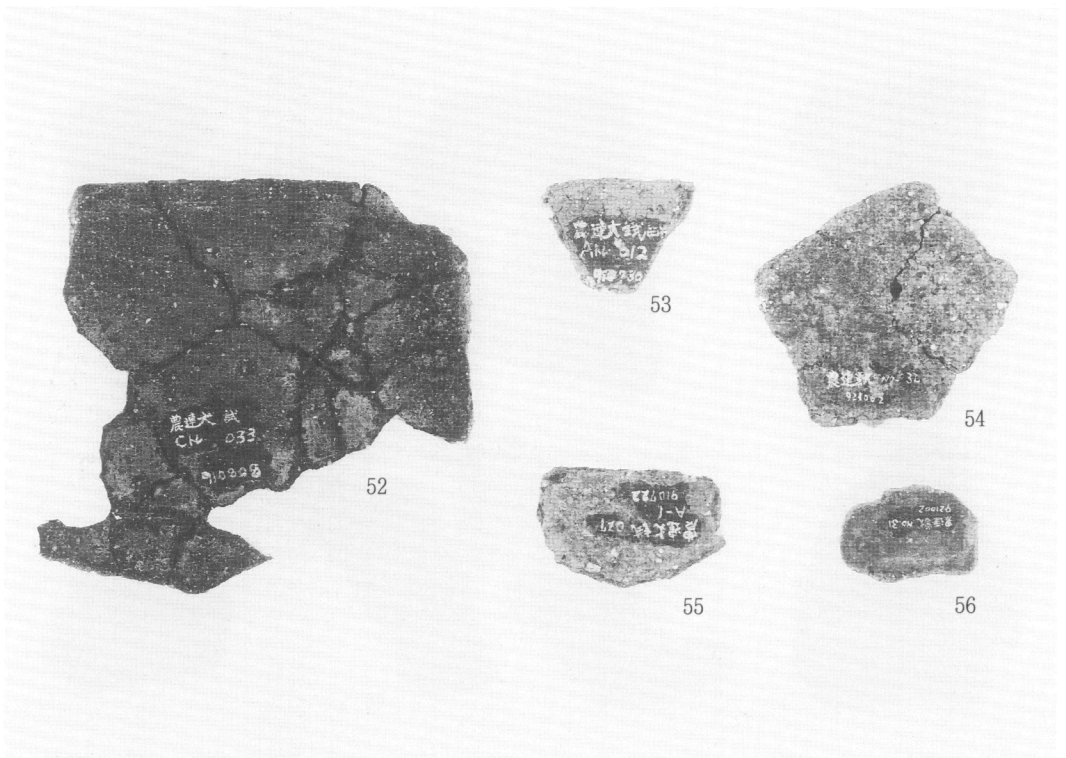
縄文時代河川跡出土遺物(10) 晩期土器深鉢胴部

(裏)

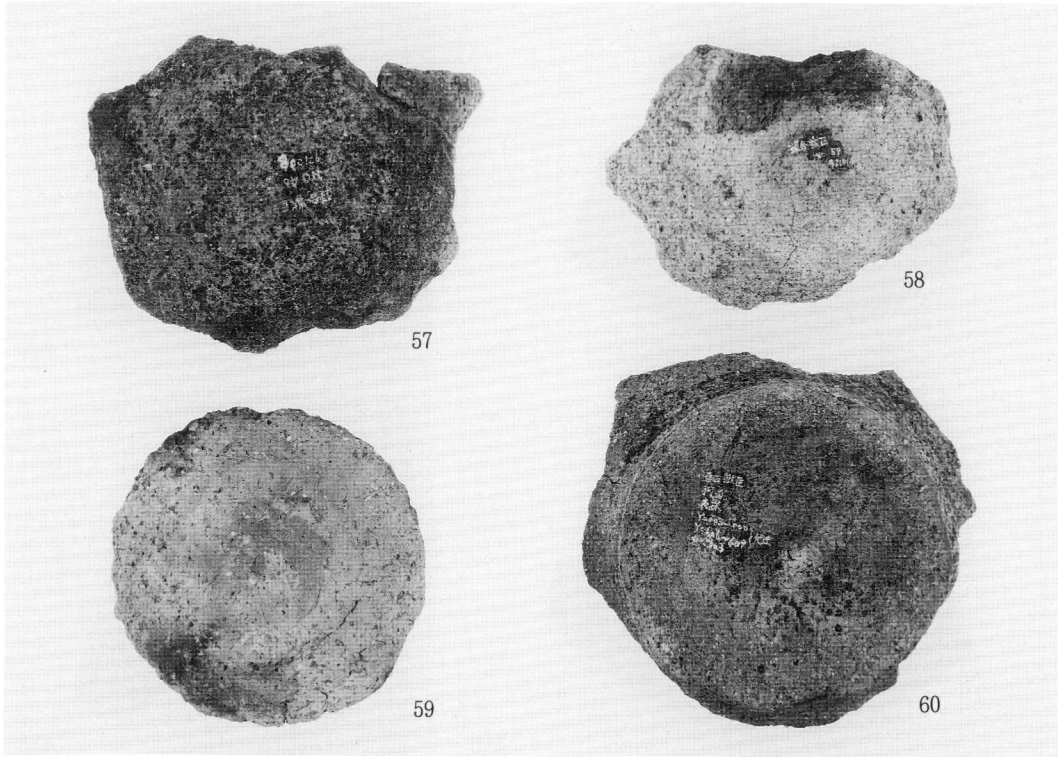
吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(17)



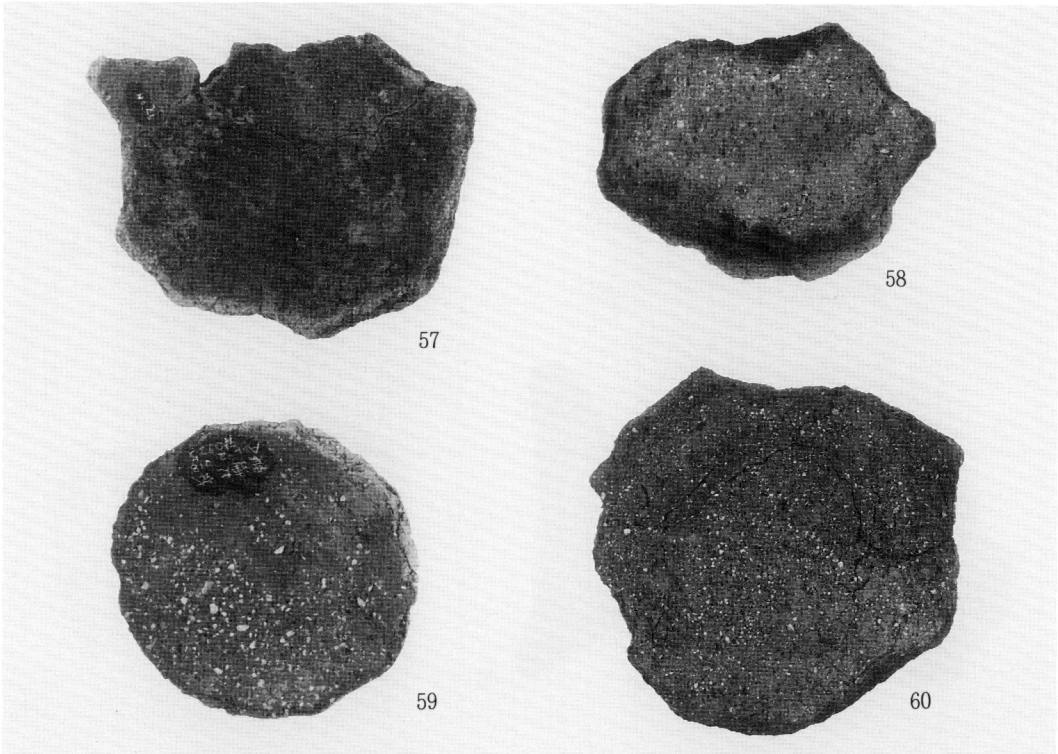
(表)



(裏)

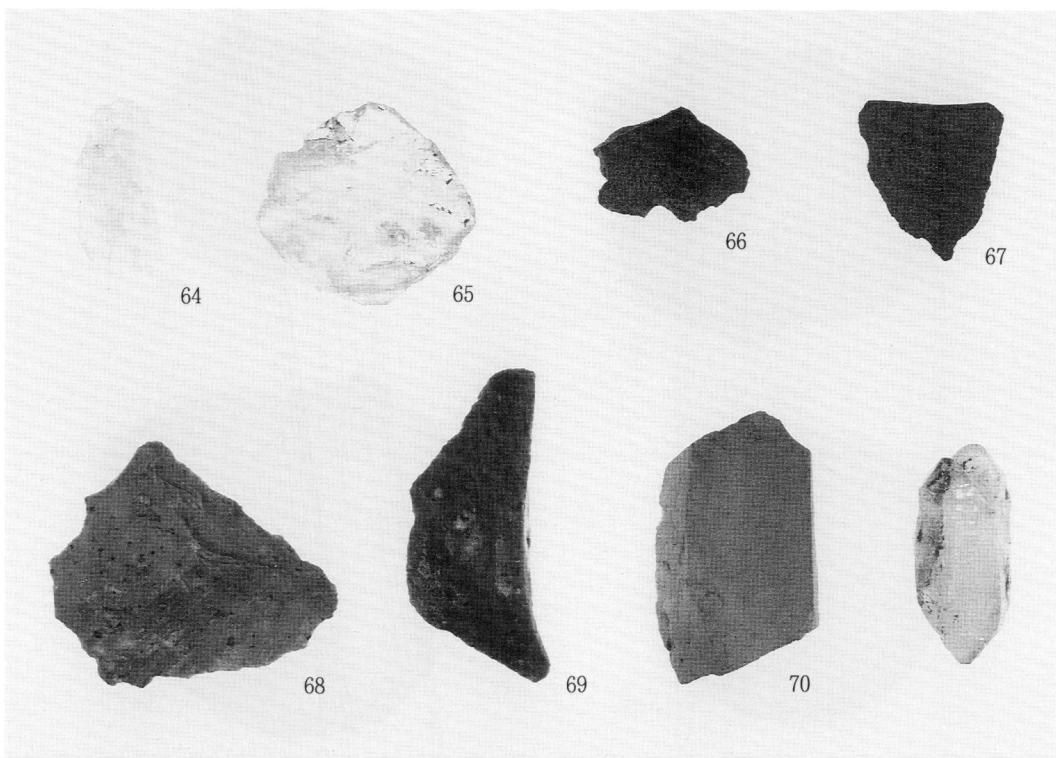
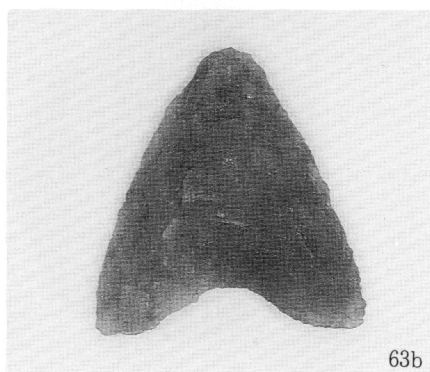
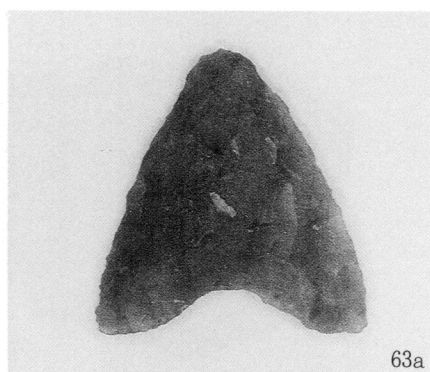
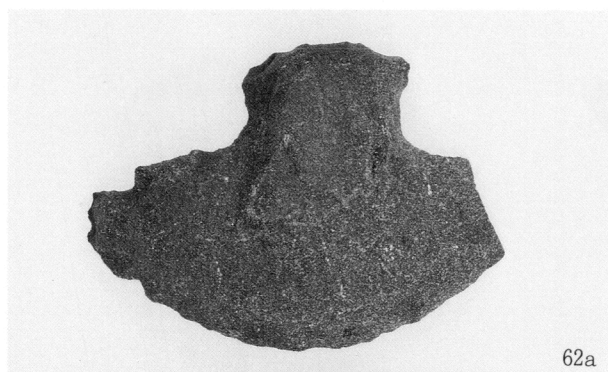


(表)

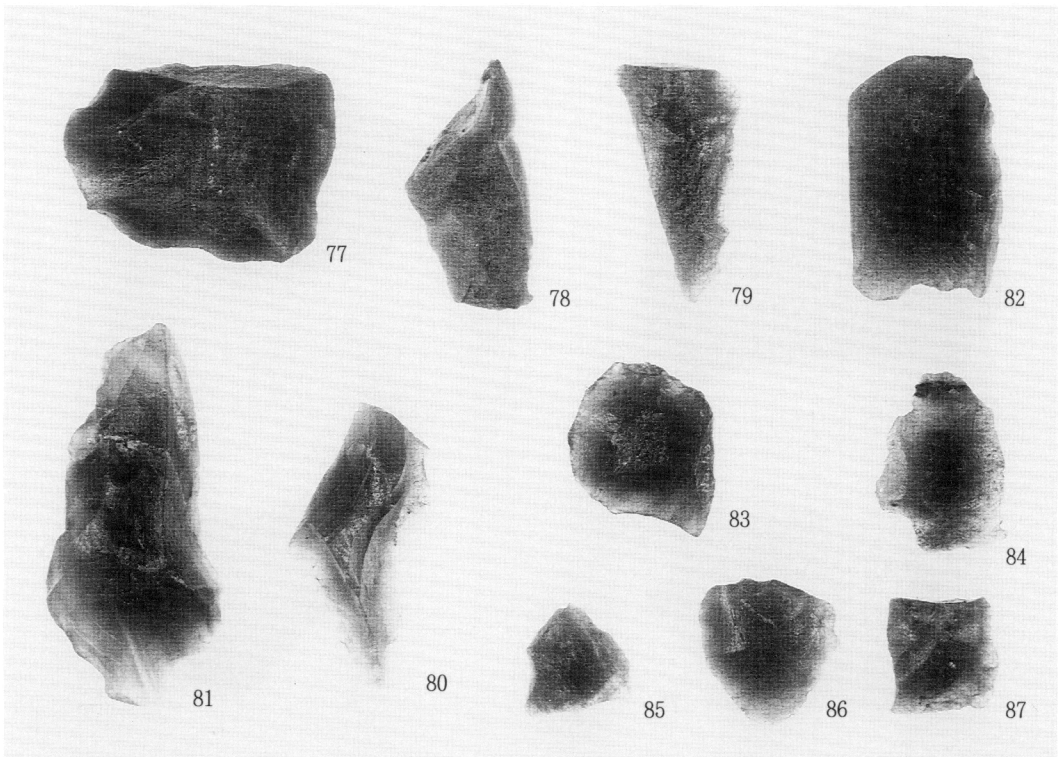
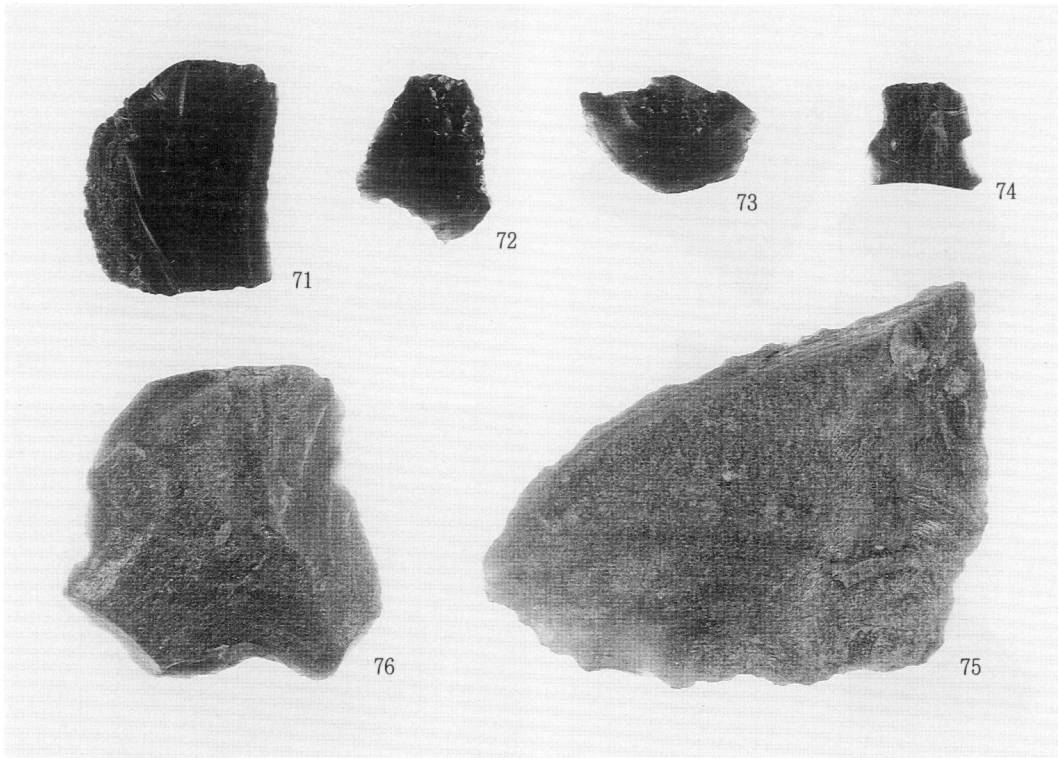


(裏)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(19)

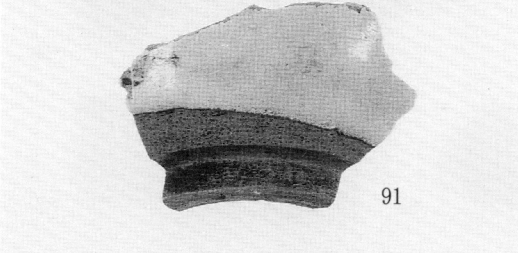
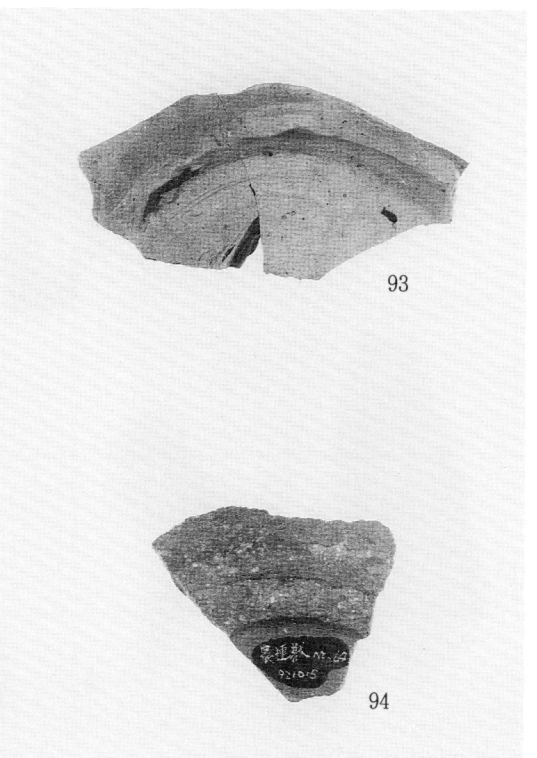
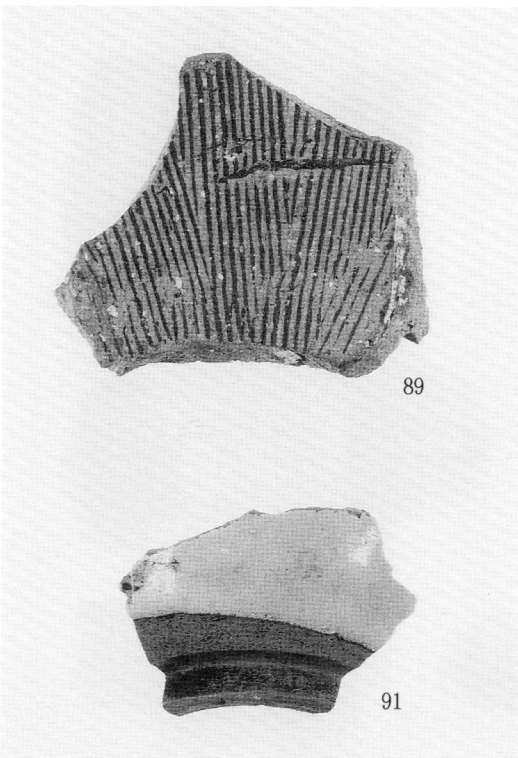
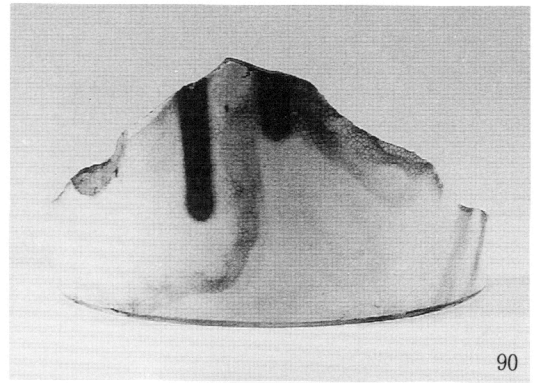
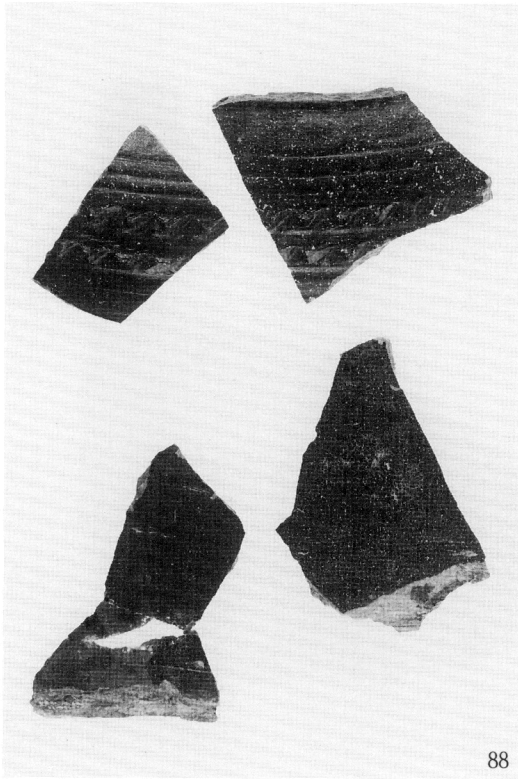


縄文時代河川跡出土遺物(13) 石匙・石鏃・各種石材剥片



縄文時代河川跡出土遺物(14) 黒曜石剥片・姫島産黒曜石剥片

吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査
(21)



近世土壌及び包含層出土遺物